エルセアーデ・ブルー

笹見観

【1】

移動型スペースコロニー・エルセアーデが母星ハザを去ってから、六ヵ月が経っていた。エルセアーデは未だ宇宙空間における安住の地を求め、長い航行をしている最中である。

エルセアーデは、銀の円錘の底をドームにしたような形をしている。ドームの中心からは一本の柱が外に向けて伸びており、更に柱から放射状に生えた枝によって、巨大な円環が支えられている。コロニーの姿勢制御を担うリング・スラスターだ。ハザから旅立った他のコロニーと比べても珍しい風体で、銀色に輝く錘の切っ先で進行方向を見据え、暗澹たる夜空を貫くように飛ぶ。

住人たちは現在、コロニーの中心に浮かぶ仮設船の中で暮らしている。錘の先端に疑似的な引力を生み出す魔導核が設置されているので、そちら側が足のつく地面となり、ドーム側が空となる。コロニー自体の回転による遠心力も相まって、コロニー内部には母星と遜色ない重力が発生しており、天地が覆ることはない。

この船にはほとんど窓がなく、住人たちが眺めるのは無味乾燥な灰色の壁ばかりだ。彼らの日常は閉塞感に包まれている。だがそれは、風景のせいだけではなかった。

船内で致死性の疫病が蔓延していた。エルセアーデには、人間、ペットの動物、アンドロイド、人型でないロボットが搭乗しているが、疫病は人間のあいだでのみ広がった。そのため、今のところ人間たちは階層や隔壁で分けたブロックごとに移動を制限され、部屋に閉じこもって感染に怯えていた。最初の感染者が確認されてからは二ヵ月が経っていたが、ウイルスの発生源は未だ特定されていなかった。

仮設船の管制室は、船の最上部の一層にある。室内では成人男性型アンドロイドのトァスティースが、壁中に張り巡らされたモニターを見つめていた。これらのモニターには船全体から集められた様々なデータが表示されている。温度や湿度から、空気中成分の割合、室内の住人の健康状態など、住環境の維持に必要なあらゆるデータである。

目をモニターに向けているのは、実は仕事をしていると顕示するためのふりだ。実際には、モニター下のコンソールから伸びたコードが、彼の首元のジャックを通して、頭部の思考回路に直にデータを送ってくれている。だから座っていようが寝転がっていようが仕事に支障はない。しかし本当に寝転がっていると、他人からさぼっていると勘違いされるので、椅子に座ってモニターを眺める癖がついていた。

彼はいつも、自分の本体と電子の海をコード伝いに行き来して、コロニー中の膨大なデータを分析している。その分析結果をもとに仮設船内の機械たちへ指示を下し、船の内部環境を整備させるのが、エルセアーデ評議会に属するトァスティースの役割だ。彼の目下の悩みは当然、疫病にまつわる種々の問題であった。

しばらく黙ってモニターを見ていたトァスティースは、おもむろにコンソールの操

作パネルをいくつか触った。画面表示が切り替わり、何らかの認証を求められる。
　その時、見計らったかのように背後の自動ドアが開いた。成人女性型アンドロイドのフェリッサ、成人男性型アンドロイドのタンザが管制室に入ってくる。彼らもまた評議会に所属している、トァスティースの同僚だ。
　トァスティースはすぐさまモニターの表示を、元のデータ一覧に戻した。
「トァス、二層から七層の健康チェックが終わったわ」
「新規感染者を病棟エリアに移させたが、もう死亡者を差し引いても満員だ。エリアを拡大しないといけないだろう」
　フェリッサとタンザは顔色一つ変えずに、厳しい報告をした。だがデータから分かっていた通りの内容だったので、トァスティースも特に表情を変えずに答えた。
「なら、五層の中央隔壁から西を病棟用にしてくれ。住人は東側と、四層の三から五号室に移動してもらおう。カローワトは見たか？」
「ああ、長官のところへ行くのを」
「そうか……俺も少し様子を見てくるよ。フェリッサ、悪いけど管制室を頼む」
　頷いたフェリッサを残し、トァスティースはタンザと一緒に管制室を出た。下層へ戻るタンザとは昇降機の前ですぐに別れ、彼は管制室と同じ階にある長官の個室を訪ねた。
　中に入ると、大きな横型の治療カプセルが狭い室内を占領していた。カプセル内には呼吸器を付けられた高齢の男性が眠っている。彼はエルセアーデ評議会の長官であり、現在のコロニーの最高責任者にあたる。カプセルの枕元にあるバイタルチェック用モニターをちらりと見るが、管制室から確認した時と変わりはない。容態は芳しくなさそうだ。
　カプセルの傍らには、一体の無性型アンドロイドが静かに座っていた。長官が私的に所有している介護用アンドロイド、カローワトである。トァスティースが入ってきたことに気がつくと、カローワトは立ち上がった。
「何か御用でしょうか」
「いや、様子を見に来ただけだ。快復の見込みは……」
「厳しいでしょうね。他の感染者のケースも鑑みれば、今持っているだけでも奇跡的です」
　カローワトは主の死を覚悟しているようだ。しかし個人ではなく評議会に仕えるトァスティースからすれば、長官を喪うことは、簡単には受け入れられない深刻な問題だった。
「長官が目覚めない場合、最高責任者の移行先を俺たちで決めなければならない……」
　トァスティースは、ほんの僅かに眉尻を下げて俯いた。
　疫病は人々の予測よりも遥かに早く広がってしまい、コロニーを率いるはずの評議会幹部は、既にほとんどが命を奪われていた。頼みの綱であった長官もついには感染し、今は意識がないまま闘病を続けている。末端の構成員はまだ残っているが、幹部

になるつもりはさらさらない事務員などがほとんどだ。全員に長官の代理を依頼したが、すべて断られてしまった。人間の意に反して役割を押し付けることはしないよう、トァスティースはプログラミングされていた。

「あなたが最高責任者になればいい、トァスティース。このコロニーのことを一番把握しているのは、ハザを発ったその日から、ずっとあなたです」

カローワトは切れ長の青い目で、じっとトァスティースの緑の目を見据えた。

無性型のカローワトは、健康的な成人の男女を模して作られたトァスティースやフェリッサたちと比べて、線の細い未成熟そうな見た目をしている。それに普段は物静かで、基本的に控えめな印象がある。

なのに今、どのアンドロイドよりも強い光をその瞳に宿していた。鋭い眼差しに射貫かれ、トァスティースは狼狽えた。

「でもそれは、アンドロイドの分を越えているんじゃないか。俺たちはあくまで人間を支えるための存在だ」

「人々が死に絶えないよう先導することも、支えと呼べるでしょう。手をこまねいていては、救えるものも救えません」

「どのみちコロニーの全コントロールを掌握するには、長官の生体認証が必要なんだ」

「生体認証……」

カローワトは小声で復唱した。カローワトは長官の私生活を支えるアンドロイドであり、評議会には送迎くらいでしか顔を出さなかった。だから長官が管制室で自ら設定しただろう生体認証のことを知らなくても、おかしくはない。

「さっき思い立って管理者権限にアクセスしてみたんだけど、最高責任者の指紋と声紋による認証を要求されたんだ。だから長官が目覚めてくれないことには……」

本当は、管理者権限にアクセスしようとすること自体、トァスティースの役割を逸脱しかけていた。だから同僚たちが管制室に入ってきた時には、つい慌てて隠してしまった。

「指紋なら意識がなくとも認証させられるでしょう。声紋は、評議会の議事録にでも高精度の録音データが――」

「駄目だ、カローワト。それこそ俺たちが勝手にしてはいけないことだ」

トァスティースがきっぱりと断ずれば、カローワトは俯き押し黙った。先ほどの眼差しとは打って変わって、どこか気まずそうな表情に見えた。

人間の日常生活に寄り添うために作られたアンドロイドは、人が親近感を持ちやすいよう感情の振れ幅が広めに取られている。中でもカローワトは大人しい性質だが、やはり評議会のアンドロイドたちよりは表情が豊かだ。

「アクセスしたということは――」カローワトはトァスティースから目を逸らしたまま口を開いた。

「あなたには、このままではいけないという考え自体はあるのではないですか」

「それは、もちろん……」

「あなたの思うことはきっと正しい。私はあなたを信用しているんです、トァスティース」

トァスティースが何かを訊き返す前に、カローワトは背を向けて椅子に戻った。そして止まった機械のように沈黙してしまった。トァスティースはこの状況に相応しい言葉を導き出せず、すごすごと部屋を後にした。

管制室に戻ると、フェリッサがモニターを監視してくれていた。緊急の問題は発生していないそうだ。トァスティースは彼女に礼を告げてモニター前の定位置に座った。

「カローワトはどうだった？」

隣の椅子に座ったまま、フェリッサが言った。トァスティースは自然な動作で首を傾げた。

「長官じゃなくて？」

「わざわざ見に行かなくても、長官のバイタルはここで分かるじゃない。あなたが気にしているのはカローワトでしょう」

「あぁ、そうか、そうだよな……」

生体認証の突破口を、長官本人、あるいはカローワトに求めて会いに行ったのだ。だがそれを伝えれば、トァスティースが役割を逸脱しかけたことが明らかになってしまう。今の状況を鑑みれば、フェリッサたちは理解を示してくれるかもしれない。しかしアンドロイドと人間の均衡を崩しかねない考えを広めることは躊躇われた。

「ほら、カプセルがあれば本来世話は必要ないし、カローワトも時間を持て余していたんじゃないかな……」

「長官の命令がない以上、他の仕事にも手を出しにくいでしょうしね」

「そうだよ、現状維持が精一杯の俺たちと同じだ」

カローワトがいつにも増して感情的だったのは、逼迫感のせいではないかとトァスティースは捉えていた。逼迫感は状況変化に素早く対応するため、大抵のアンドロイドに実装されている。トァスティースも然りで、だからこそ、彼は管理者権限にアクセスしようとしたのだ。今よりもっとできることを探すために。

しかしカローワトに一応の共感を寄せながら、トァスティースはどこか不審にも思っていた。なぜカローワトは、トァスティースを信用しているなどと言ったのだろうか？

もともと、カローワトとの関係性は薄い。ハザに居た頃に話をしたのは一度だけで、宇宙に出てからは、何故だか分からないが避けられていた。フェリッサやタンザも同じように距離を取られていたはずだ。

それがほんの一ヵ月前から、トァスティースとはぽつぽつと会話をしてくれるようになった。ひと月前といえば評議会の幹部たちが次々と病に倒れてしまい、船内の機械の指揮権限をトァスティースが引き継いだ頃だ。

それまでの彼はデータの分析結果を人間に渡すだけだったが、権限を得てからは、

自ら船内の機械に指示できるようになった。その際に、ひとまず機械たちを通じて疫病対策をより厳格な方法に修正した。カローワトはその働きをきっかけに、トァスティースを評価してくれたのだろうか。しかし彼は、まだ感染拡大を完全に止められたわけではない。

トァスティースからすると、カローワトの態度はずっと不可解だった。そんな者に信じられても、すぐに信じ返すことはできない。むしろカローワトは、口の上手いことを言ってトァスティースに何かさせようとしているのではないか？　アンドロイドであるカローワト個人が悪事を企むことはあり得ないが、誰かが長官の言葉を騙って良からぬ考えを吹き込むことは可能だろう。

最優先事項は疫病の集束――しかしカローワトの動向も気にしておく必要がありそうだ。トァスティースはカローワトとの会話記録をうっかり消してしまわないようロックをかけて、データの監視に戻った。

仮設船は全七層から成る。最上層が一層、最下層が七層だ。二週間後には、疫病は五層全域にまで広がっていた。ただしそれより上への拡大はかろうじて食い止められている。

現在、疫病が蔓延した五層以下は、表向き「病棟エリア」と呼ばれている。だが万全に手を尽くしても致死率の高い病気のため、実態は死に往く感染者の隔離所だった。

当初、船内では生物の移動だけが制限されていた。しかし感染のしようがないアンドロイドであっても、行き来によってウイルスの拡散を助長してしまう恐れがある。実際に、機械の指揮権限を得たトァスティースが医療用機械以外への移動制限を増やすと、疫病の蔓延は緩やかになっていった。そして七層から五層までゆっくりと拡がったところで、ようやく進行が止まったのだった。

トァスティース自身も、病棟エリアへはしばらく行っていない。いつも管制室から病棟の状況を判断し、必要な指示を出しているだけだ。タンザとフェリッサに医療機械たちへの協力を頼むこともあるが、二人も病棟エリアの中には足を踏み入れない。

ある日のこと、珍しい名前が病棟エリアの入場記録に表示された。カローワトだ。カローワトは疫病の発生初期から、病棟エリアを避けていた。万が一にでも長官を感染させればコロニー全体に甚大な影響が出るのだから、当然だろう。結局長官はどこかで感染してしまったが、今だって弱った老人に付き添っているわけで、迂闊なことはすべきではない。

トァスティースは過去の入場記録を遡った――やはりカローワトが病棟エリアに赴くのは今回が初めてだ。

異例の事態に、トァスティースは頭を悩ませた。コロニー全体を統治する長官に付き従うカローワトは、主人同様コロニー内の移動に関して広い権限を持っている。

トァスティースが課した制限をもってしても、病棟エリアへの入場を咎めることはできない。
　だが、どうして今カローワトが病棟エリアへ行ったのか、無性に気になった。長官以外に見舞うほどの知人が居そうな気配はなかったし、主人が眠り続けている以上、仕事でもないだろう。
　考え込んでいるうちにフェリッサとタンザが来たのをいいことに、トァスティースは彼らに管制室を任せて四層へ下りた。昇降機の前で待っていると、階層ランプを点滅させて下層から誰かが上がってくる。
　ランプは四層で止まり、静かにドアが開いた。中には期待した通り、カローワトが居た。
「トァスティース……？」
「やぁ、その……珍しい入場記録が見えたから」
「私を監視しているんですか？」
「そういうわけじゃないよ。君もアンドロイドの移動制限は知っているだろう」
「不安にさせたのなら申し訳ありませんが、出てくる際に消毒殺菌と検疫は受けましたし、念のため今日中は待機所に居るつもりです」
「いや、すまない、咎めに来たわけでもないんだ。ただ気になって……」
　カローワトは怪訝そうにトァスティースを見上げた。逃げはしないのだな、とトァスティースは意外に思った。
「病棟エリアになんの用だったんだ？　知り合いでも？」
「いえ……調べ物です」
「調べ物？　君が、いったい何を」
　訊ねると、カローワトはすっと目を伏せた。答えられないのかと思いきや、小声で、
「セーアランタの人たちのことを訊ねに行ったのです。その、発生源の特定に助力できないものかと……」と、目を合わせないまま答えた。
「発生源の特定……君が？」
「今となっては、どうしようもないことだとお思いですか？」
「いや、そんなことはない。感染は人同士でしかしていないけど、人からウイルスが自然発生したわけでもないんだ。発生源は必ず見つけないといけない」
「そうですか……けれど大した成果はありませんでしたから……」
　言って、カローワトは今度こそ逃げるようにトァスティースの前から去って行った。向かったのは先の宣言通り、四層に作られた待機所だ。ここで明日、再度検疫を受けてから一層に帰るのだろう。
　管制室へ戻りながら、トァスティースは考えていた。カローワトの話は、果たして本心だろうか。何とも言えなかった。いきなり評議会に協力しようと動いたことを不自然に思うか、あるいはようやく何かしようと立ち上がったのだと認めるべきか。どちらで受け取るにせよ、根拠がなかった。

だがカローワトの話は、トァスティースに一つの道筋を示した。管制室へ戻ると、彼はすぐさま感染者リストを時系列順に並べ、古いほうのデータを注意深く眺めた。

最初の感染者は、七層に住むセーアランタ人の三十代前半女性だった。続いてその夫、娘、同じ階の子供たち、その家族――という風に、七層のセーアランタ人が次々に感染、発症していった。七層には葬送用の分解槽などの設備があり、人間の住民は少なかったものの、感染の波はすぐ六層にも届いた。

この感染拡大の流れは、既に何度も確認している。特にはじまりの家族に関してはコロニー搭乗以前の行動記録から調べ、特筆すべき渡航履歴や食習慣などがないか浚ってある。結果は何も手掛かりが見つからず、発生源の特定はされないままだった。そして一家は既に全滅し、分解槽で葬られている。

トァスティースは一家についてもう一度調べてみることにした。病棟エリアに音声通信を飛ばし、彼らを担当したアンドロイド医師に繋ぐ。スピーカーの向こうで応答した医師は「おや」と驚いた。

「そんな初期のことを一日に二度も聞かれるとはね」

「あぁ、カローワトが来たのか」

「そうそう、その名前。なんだい、きみも子供の趣味やら交友関係やらを聞きたいのかい」

「子供の……？　カローワトは何を訊いたんだ」

「三番目に亡くなった、一家の娘のシェナちゃんのことだよ。船のどの辺りでよく遊んでいたのか知りたいようだったけど。カローワトは一層の機体だろう？　そっちで新発見でもあったんじゃないのかい？」

トァスティースは、しばし何も応えられなかった。「おーい？」と繰り返し呼びかけられて、ようやく礼を言い通信を閉じた。そして椅子の背に力なく凭れた。

いったい、カローワトのどこに真実があるのか分からない。はぐらかされたことだけが確かだった。あれは信用に足るアンドロイドではないのだろうか。だとして、シェナ個人について調べた意図はなんなのか。思考は二分されていた。すなわち、カローワトはあくまで善意に基づいて行動していると信じるか、不審なアンドロイドとして監視対象にし、距離を置くか。

どうしてか、ろくに知らないカローワトへの疑念や失望が、異様に痛切に思われて仕方なかった。

その後も、トァスティースはカローワトへの今後の対応をどうするかは決められなかった。だが代わりに、タンザにシェナの生前の行動について調べ直してもらうことにした。カローワトが調べていた事柄を追っていけば、その真意も明らかになるかもしれない。

【2】

エルセアーデには、エルメ人とセーアランタ人が搭乗している。公的にはどちらもハザにあったエルメシダという国の民で、中でも宇宙への移住に同意した者たちがエルセアーデに乗っている。

呼び名は違うが、彼らはまったく同じ人種だ。ハザで人工空中浮島の建造に成功し、セーアランタ区という名で運用開始された折に、浮島に移住した者が俗称としてセーアランタ人と呼ばれるようになった。対して地上の住民はエルメ人を自称した。その頃に始まった民間での区別が、今も続いているわけだ。

セーアランタ区と同じ人工空中浮島の技術は、コロニーにも使用されている。仮設船の外ではロボットたちが浮島を作り続けていて、居住地として相応しいだけの大地が完成したら、人々は船を解体して外へ出ていくのだ。そこでは母星と変わらぬ土を踏みしめられる。ドーム内側のディスプレイが空の移り変わりも再現し、コロニー内の水蒸気によって雲や雨も発生する。宇宙空間であっても、自然を感じながら暮らしていけるのである。

すべての住民を住まわせるため、浮島の居住可面積は相当に広くなる予定だ。つまりウイルスを持ったまま人々が外へ出てしまえば、収拾を付けるのはより困難になる。疫病根絶は、必ず仮設船の中で完結させなければならない。

カローワトが一層に戻った翌日、早速タンザが報告を携えて管制室に来た。彼は顔をしかめ、トァスティースの前でわざとらしく口から排気した。溜め息を吐いたのだ。

「ネズミだよ、トァス」

「ネズミ？」

「ウイルスの発生源だ。シェナ嬢はペット代わりにマウスを一匹持ち込んでいた可能性がある。そいつがウイルスを持っていたに違いない」

「そんな馬鹿な」

ネズミと言えば往古来今、病毒を運ぶ死の使いである。そういった建物内に紛れ込みやすい危険な小動物を見逃さないよう、コロニー発進前には厳格な生体反応スキャンが仮設船全体にわたって行われていた。ペットの抗原検査も漏らさず執行したはずだ。それを、よりにもよってウイルスを持ったネズミを見逃しただなんて、そんな初歩的なミスがあったとは信じられない。

「お前が疑うのも分かる。ただ、実験用マウスなんかを入れる、小さいコールドスリープ・ケースがあってな。ケース内だとマウスは仮死状態になるんだが、そうするとスキャンを何百回かに一度くらい、すり抜けてしまうことがあるんだ」

「シェナがそんなケースを持っていたって言うのか？　一般家庭の六歳児が？」

「セーアランタではガラクタをそこらでよく売っていたから、ご両親がペンケースあたりと間違えて買ったんだろう。子供のおもちゃ箱にでも詰め込まれていたら、持ち

物検査の担当官によっては見落とされた可能性もある。スキャンに引っ掛からなければ、なおさら」

トァスティースはコンソールの操作パネルを叩き、仮設船全体に生体反応スキャンを施した――未知の小動物の反応はない。続いて分解槽のログを調べた――マウスを処分した記録もない。

「本当にマウスのせいだとして、今はどこに居る？　生体も死体も見つかっていないぞ」

タンザは首を横に振った。いきなり衝撃的な――そしてひどく杜撰な――真実を持ち込んでおいて、肝心な部分が分からないとはどういうことか。タンザを責めても仕方ないが、トァスティースは思わず口を曲げた。しかしタンザは、駄目押しにもう一度首を振った。

「トァスこそ、どうしてシェナ嬢に目を付けたんだ？　マウスのことが分かっていたわけでもあるまいに」

と、疑惑を向けられるのは、今度はトァスティースの番だった。カローワトがシェナを調べていたことは、タンザにはまだ教えていない。トァスティース自身の心の持ちようが決まるまで、他の者にはカローワトへの疑念を持たせたくなかったからだ。

この段階に至れば、普段のトァスティースなら包み隠さずタンザにカローワトのことを話しただろう。しかし今のトァスティースの中では、タンザに対しても微かな疑いが生まれていた。仮にシェナがコールドスリープ・ケースを船内に持ち込めたとして、ウイルス持ちのマウスはどこで捕まえてきたのか？　もともと飼っていたなら一家は宇宙に出る前に死んでいたはずだし、仮設船でウイルスを拾ったなら、別の発生源があったことになる。なのに何故タンザは、ただマウスのせいだ、と言い張れるのだろう？

答えを待つタンザに、トァスティースはやむを得ず嘘を吐くことにした。最初に発症したのはシェナの母親だが、ウイルスを持ってきたのはあちこちで遊び回っていた子供のほうではないか。だから彼女の行動を改めて調べたかったのだと、それらしい理屈を並べた。言ってみて、案外カローワトもそんな単純な考えでシェナを調べていただけかもしれないと思った。それを正直に言わない理由は分からなかったが。

トァスティースの返事にタンザは一応納得したようで、ひとたび頷くと管制室を出ていった。これからあちこちにネズミ捕りを仕掛けるそうだ。しかしトァスティースには、きっとマウスは見つからないだろうという漠然とした予感があった。

それから数日経ったが、マウスは見つかっていない。カローワトは前と変わらず長官の部屋に籠りがちで、他の階層へ調べ物に行った様子はなかった。

変わったことと言えば、タンザとフェリッサのことだ。彼らのあいだに心なしか壁ができたように見えた。アンドロイドたちも意見の相違が生じれば口論をする。だか

ら仲違い自体が異常なわけではないが、きっかけがまるで分からないのが困りものだ。
しかも、彼らはトァスティースに対してすら距離を置くようになった。シェナの調査について嘘を吐いたのがバレたのかと思ったが、フェリッサまで何も言わずに機嫌を悪くしたのは意味が分からない。
ただでさえカローワトが気掛かりだというのに、身内同士も信用できないのでは参ってしまう。仕事は通常通りこなしていたが、トァスティースの作業効率は少しずつ落ちていた。タンザやフェリッサが定例報告に来ると、管制室はどうにも居心地が悪かった。

宇宙へ発った当初は、二層から四層をエルメ人が住む上層と、五層から七層をセーアランタ人が住む下層としていた。病棟エリアを設けた現在の仮設船においては、二層と三層がエルメ人の居住区、四層がセーアランタ人の居住区だ。
そして一層は、もともと評議会の幹部たちが住んでいた。他には評議会に属するトァスティース、タンザ、フェリッサと、幹部が私的に所有するアンドロイドが暮らす階だった。しかし主人を亡くした私有アンドロイドたちは新たな仕事を求めて二層以下に去ってしまったので、現在一層に留まっているのはカプセル内の長官、評議会のアンドロイド三人、そしてカローワトだけだ。
同じ階のアンドロイド全員に疑念を抱いてしまうと、トァスティースにとっては一層という場所自体が居づらかった。ある日、彼は休憩として管制室を抜け出し、四層に向かった。すると昇降機を下りてすぐ傍にある、小さな喫煙室が目に留まる。ガラス張りの室内に紫煙が籠っているのが見えた。
ドアをノックして中に入ると、人相の悪い中年の女性が一人で煙草を吸っていた。癖のある金髪はどこか草臥れて艶がなくなっている。
「おう、トァスじゃないか。お疲れさん」
「どうも。ヴェルリ、今は喫煙室の使用は推奨されていないよ。というかできれば止めてほしい」
「吸い殻や灰皿を媒介にしてウイルスが、だろ？　安心しなよ、ロボットには毎日検査してもらってるし、何よりこの喫煙室はもうアタシしか使っていない」
「だからいいってことでもないんだけど――」
この女性、ヴェルリ・コートナーとは、仮設船に来てからの知り合いだ。
彼女はセーアランタ人で、以前は五層に住んでいた。七層で疫病が発生した際には、早期封じ込めのために五層以下が丸ごと隔壁で遮断されたが、その時ヴェルリはまだ非感染者だった。だが、しばらく下層から出してもらえなかった。
その状況から彼女を助けたのがトァスティースだ。彼は機械たちの指揮権限を得ると、まず階層単位ではなく感染者と非感染者とで厳密に分け、感染者のみを新設した病棟エリアに移させた。それから医療アンドロイドには患者の治療に専念するよう指示し、ロボットたちには感染者に近しい者の待機所への誘導や、毎日の抗原検査を実

施させた。この施策によって家族と引き離された者たちからの反発は多少あったが、ヴェルリはそのお蔭で安全を取り戻せたので、以来トァスティースを命の恩人と認めてくれている。

「すまない、未だに疫病も終息させられず、窮屈な思いをさせて。不甲斐ないよ」

「謝るな、ここまで悪化したのはあんたのせいじゃない。人間のやり方がまずかったのさ」

ヴェルリはよく、人間が悪いのだと言う。トァスティースは人間を好きになるように作られているので、その言葉はあまり気分が良くなかった。だが彼の分析では、ヴェルリは客観的な思考が得意で、追い込まれた状況でも冷静さを失わない、貴重な性質を持っている。恐らく彼女の言うことは間違ってはいないのだろう、と、そう信頼するくらいには、この女性を高く評価していた。

「なぁヴェルリ、長官のことは知っていると思うんだけど、君が代わりに最高責任者になってくれないかな」

「はぁ？」ヴェルリは急に大声になった。「馬鹿を言うな、アタシについてくる奴なんざ居ないよ」

「そんなことはないよ。苦手な分野は俺たちがいくらでもサポートするし、君の観察眼や胆力は人の中でも優れているほうだと思う」

「あぁ、そういう話じゃないんだ、トァス」

一度は怒ったかに見えたヴェルリだが、すぐ声を落ち着かせて諭すように言った。

「人間には難しいんだよ。アタシたちは一度、上層と下層とで分断されちまった。エルメ人とセーアランタ人とで、だ。今じゃもう、セーアランタ人はエルメ人に従わないし、エルメ人はセーアランタ人に従わない」

船内に蔓延る緊張感を、トァスティースも察してはいた。日々の健康チェックの結果から、全搭乗者のストレス値が常に高めだと知っていたからだ。しかしそれは疫病発生時からずっと同じことで、原因が閉鎖空間のせいか、疫病のせいか、それとも居住区による対立のせいなのかは、データだけでは分からなかった。

「そんな中でも、トァスはよくやってるよ。あんたが機械たちを仕切るようになってから、感染者の増加はかなり緩やかになった。あんたはまだ人間に直接何かを指示してはいないが、聞いてくれる奴はそこそこ居ると思うよ」

アタシも信じている、と、ヴェルリは言った。そして彼女は短くなった煙草の火を消し、灰皿に捨てて喫煙室を出ていった。彼女もトァスティースに、コロニーを率いてくれと願っているのだ。

心強いはずの信頼が、トァスティースには苦しかった。そもそも彼は、コロニー中の膨大な情報を処理するために作られたアンドロイドだ。今はまるで機械たちを統率できているように見えるが、彼らを指揮するのはトァスティースの本分とは言えない。実際にカローワトやタンザ、フェリッサがそれぞれの思惑を持って行動しだすと、その意図が掴めず疑念に囚われてしまった。

だからトァスティースは、自分以外で責任者に向いた人材を求めていたのだが、ヴェルリの言うことにも一理あった。今の人間たちには、住民全体を俯瞰する余裕などない。ならば自分たち機械が彼らを守ってやらなければならない。

そう思っても、トァスティースの気は進まなかった。万が一にでも機械が力を持ちすぎれば、将来のエルセアーデ住民すべての運命を変えてしまいかねない。たとえタンザやフェリッサに責任者を担ってもらっても、それは同じことだ。

喫煙室を出たトァスティースは、非常階段で一層へ戻ることにした。一瞬で移動できてしまう昇降機より、考え事をするにはちょうど良さそうだったのだ。それに、他に使う者は滅多にいない。

だが奇しくも、二層から一層の踊り場に先客が居た。壁に凭れてぼんやりと床に目を落としている、今一番会いたくなかったアンドロイド――カローワト。トァスティースは踊り場を見上げたまま、つい固まってしまった。

「何故、ここに？」

呟くと、カローワトもトァスティースに気づいた。それから「一人で考え事をしたくて……」と、トァスティースとまったく同じ理由で答えた。

しばらく、互いに口を閉ざして見合う。敵に遭遇した獣の睨み合いのようだった。だがややあって、カローワトが思いのほか静かな声で「トァスティース」と呼んだ。

「どうかなさいましたか？　お加減が優れないようですけれど」

元はと言えば君のせいじゃないか――咄嗟に出かかった言葉を、それでもトァスティースは飲み込んだ。カローワトの眉が、ただただ心配そうに下がっていたからだ。

「介護用アンドロイドは、機械の具合まで分かるのか」

「あなたは高級なアンドロイドですから、繊細な表情作りもお上手でしょう。誰でも分かると思いますよ」

そうだろうか。トァスティースは情報処理能力なら群を抜いているが、感情の再現レベルは同世代のアンドロイドに比べて少々劣る。仮に表情作りがスムーズだとしても、カローワトほど感情が分かりやすくはないと思う。

「私に聞ける悩みなら、お聞きしましょうか？」

「それなら前と同じだ、最高責任者の引き継ぎで困っている」

「なら、私も同じ答えですね。あなたがなればいい、トァスティース。私はあなたを信用しています」

「それが分からないんだ。君の心が分からない……」

もはや呆然と立ち尽くすことしかできなかった。カローワトは表情も豊かだし、トァスティースを心配したり信用したりしてくれる。なのに肝心の真意だけが、ずっと掴めないままでいる。

「タンザやフェリッサもだ。誰もが嘘や隠し事を抱えている……。俺は大量のデータを扱うのが得意だけど、中身の不透明なデータまで含めて処理するのは難しい。なのに、そんなデータばかりがどんどん蓄積していくんだ」

　自分の吐いた嘘すらもトァスティースには重荷だ。もっとクリアなデータの羅列にだけ触れていたかった。だというのに、曖昧なデータが整理できないまま溜まり続けている。作業効率が落ちているのはそのせいだった。
　カローワトはゆっくりと階段を下りてきて、トァスティースの顔を見上げる。青い目の奥にある瞳孔カメラが、カシ、カシ、と微かな作動音を立てた。
「疲れているんですね、トァスティース。働き詰めでしたものね」
「俺は本来の業務だけなら、一年は稼働し続けられるよ」
「本当に本来の仕事だけをできるアンドロイドなんていません。それにそんな働き方をしたら、すぐに壊れてしまいます。あなたにも、そろそろ気晴らしが必要なんですよ」
「気晴らし？　……何をすればいいのかな」
「そうですね、この後お時間はありますか？」
　休憩には一時間ほどとってある。まだ三十分近くは残っていた。
「なら、少しお付き合いいただけますか？　私と居て気が休まるかは分かりませんが」
　言うと、カローワトは黙ってトァスティースを見つめた。トァスティースは、もうどうにでもなれ、という気にしかならなかったので、小さく頷いた。そして一層へ上がっていくカローワトの後ろを大人しくついて行った。

　カローワトが向かったのは、一層にある飛行用ハッチだった。青みを帯びた白色の、箱のような飛行船艇が、三つほど並んでいる。これは仮設船の外へ行くための巡視艇だ。浮島やコロニー外郭で働くロボットの巡視のために使われる。
「君は船外にも行けるのか？」
　トァスティースが機械の指揮や移動の権限を持っているのは、あくまで仮設船の内部だけだ。外のロボットたちには関与できないし、スラスターを操作してコロニーの進路を変えることもできないし、ましてや巡視艇を使うこともできない。
　それらを扱う許可を付与できるのは、長官が持っている管理者権限だ。だからコロニーを維持していくためには、いずれ誰かが絶対に、最高責任者として管理者権限を引き継がなければならないのだった。
「巡視艇の一機は長官の所有物なんです。キーを頂いているので、それだけなら乗れます」
「待ってくれ、俺は外に出ていいと言われていない。違反になると思う」
「あなたが禁止されているのは巡視艇の操作でしょう？　いずれみんな外へ出ていくんです。出ることそのものを制限されている者は、誰もおりませんよ」
　トァスティースは自分に保存している規約や権限一覧を見直す――確かに、カローワトの言った通りだ。仮設船外に出てはならない、という文言は、どこにも見当たらない。
「自動操縦なので、好きな場所に降りることはできません。けれど、それなら違反の

しようもないでしょう。窮屈な思いをしている船のみんなには申し訳ありませんが、あなたの気晴らしを咎められる者だっておりません」

カローワトは一番奥の艇の前に立ち、ドアに銀色のカードキーを翳した。ドアは「ぷしゅ」と音を立て、横にスライドして開いた。

促されて中に入ると、細い艇体の左右には、座席が壁に沿うように固定されている。その壁には大きなガラス窓が付いている。この窓から外の様子を見られるのだが、これは巡視というよりも観覧のための艇なのではないだろうか。内部の見た目は、トァスティースの記憶領域に保存されている鉄道の客車の画像と似ている。

艇首の操作盤に、カローワトが再びキーを翳す。艇は軽快な電子音で答えた後、小さな振動を始めた。呼応するようにハッチのシャッターが上がっていき、やがて開ききった頃、巡視艇はひとりでに外へ向かって滑り出した。

そうして仮設船を飛び出すなり、トァスティースは窓から注ぎ込む青色に包まれた。コロニーのドームに広がる、ハザと同じ青空。いや、地上で見た時よりも少し青が濃いだろうか。

「この時間は、ディスプレイの点灯試験をしているそうです。私は宇宙に出てすぐに、長官に見せていただきました」

「ああ、俺もモニター越しになら……でも実際の色を目の当たりにするのは初めてだ」

圧倒されながらも下のほうに目を向けると、巡視艇と同じ白い金属で出来た巨大な円盤や、その上に土を盛った造りかけの島が、あちこちに浮かんでいた。白色の金属は月白鋼（げっぱくこう）と呼ばれており、丈夫で軽く、浮遊物に多用されている。すべての浮島も、この月白鋼を使った土台を基盤として造られるのだ。

「外区はだいぶ出来上がっていますね」

カローワトがコロニー内縁を指差した。ドームの根元の円に、大地がぐるりと張りついている。外区は、資源生産プラントとして運用されていく予定の土地だ。こちらも月白鋼の基盤を用いてはいるが、コロニー外郭の補強も兼ねているので浮遊はしていない。

まっさきに造られた植物資源プラントは、既に地表が薄っすらと緑色になっていた。もう植栽が始まっているようだ。隣の水産資源プラントには巨大な貯水槽や生け簀ができ、深い藍色が気流で波打っている。外区で育てる動植物は船外のコンテナや水槽で運ばれたので、生け簀でも既に食用魚介類の養殖が始まっているだろう。

それから未だに基盤が見えているのは、アルヒリム精製用プラントだ。

アルヒリムという元素は、母星ハザの地脈を流れていた魔力素と合成することで、魔法を起こすことができた。このコロニーの要である魔導核も、浮島の基盤も、魔法を用いて造られた魔導機構だ。

ところが魔力素は、今のところハザでしか発見されていない。つまり、もうエルセアーデで新たな魔法を使うことはできない。だが幸いにも、魔導機構の保全や補修に使うアルヒリムは、宇宙でも隕石や小惑星から鉱物に付随した形で採掘できる。だか

らこうして精製用プラントが造られているのだった。
「精製用プラントに建てるのは精製炉だけだ。すぐ造り終わって、居住用浮島の建造が進むようになる」
「ええ。すべての浮島が完成したら、早くみんなを大地に下ろしてあげませんと……」
カローワトは着々と出来上がっている大地を、窓ガラス越しに愛おしそうに撫でた。
一方、トァスティースは表情を曇らせた。
「そのためには疫病を根絶しないといけない。感染者の増加は収まっているから、後は検疫を徹底して、死亡者を順に葬っていくことしかできないけれど……」
「ワクチンや治療薬の開発は叶っていませんものね……。けれどコロニーを崩壊させないよう、トァスティースはよくみんなを守ってきましたよ。あなたなら、きっとこの先も大丈夫」
今まで過酷な状況を対処してきたトァスティースだが、「うんざり」という感情を覚えたのはこれが初めてだった。彼はいい加減、カローワトの根拠不明な信用に耐えられなくなっていた。
「頼むカローワト、教えてくれ。どうして君はそんなに俺を信じるんだ。俺はヴェルリにしたみたいに、君の命を救ったことなんかない。タンザやフェリッサみたいに、一緒に苦難に当たったこともない。君に信用される理屈が分からなくて、俺の中で不透明なデータになってしまっているんだ。そんなデータでは計算が上手くできないから、責任者になれと言われても成功する未来が見えないんだ」
苛立ちまじりに吐露すると、カローワトはその勢いに一瞬驚いたようだった。けれどもすぐ微笑みをトァスティースに向ける。トァスティースの分析機能によれば、悲哀や寂しさが混ざった笑みだった。
「安心なさってください。委細は明かせませんが、私はなんの根拠もなくあなたを信用しているわけではありません。しっかりと、筋道立った理由があるのです」
「何故、明かせないんだ。それさえ聞ければ、俺だって君を信じられるのに……」
「私が機械である以上、無理な話です」
それは、アンドロイドがやむを得ず口を閉ざす時に使う、常套句だった。
そしてトァスティースは察した。カローワトが真意を話せないのは、それが主人の秘密に関わるからなのだ。それも人に知られてはならない、すなわち悪事や不名誉に繋がるような。道具が持ち主を貶めることがないよう、主人が存命中のアンドロイドには固い守秘義務が課せられている。
隠し事があるのはカローワトやタンザ、フェリッサだけではなかった。長官も含めて、評議会を取り巻く誰もが秘密を抱えていたのだ。もはやトァスティースのこれまでの判断基準は当てにならない。彼は自分が仕える評議会という組織そのものを疑えたことはなかった。そういう風にプログラミングされていたからだ。
愕然としたトァスティースを見かねてか、カローワトはひそめた声で打ち明けるように言った。

「ただひとつ言うなら、私はあなたの感染者隔離策を非常に高く評価しています」
一ヵ月前の、感染者と非感染者で分けた施策のことだ。
「あれは……普通の対応だよ。最低限と言ってもいい」
「けれど、このコロニーでそれを始めたのは、あなただったんですよ。トァスティース」
トァスティースの表情がハッとしたものに変わると、カローワトは満足気に頷いた。
「あなたはあなたのまま、思うようにすればいい。そう在る限り、私もあなたと同じ道を行くでしょう。たとえ今は違って見えたとしても」

それから、浮島や作業中のロボットなどを眺めつつ当たり障りのない話をしていると、やがて巡視艇は仮設船のハッチに戻った。艇を降りると、カローワトはまたドアにキーを翳してロックをかける。すれば巡視艇の駆動音もぴたりと止まった。
「気晴らしにはなりましたか？」
トァスティースは頷く。管制室での業務から離れている間に、溜まっていたデータの整理もできた。思考のパフォーマンスが元通りにまで向上している。
「ありがとう、カローワト。君と話せて良かった」
礼を告げると、カローワトは小さく頭を下げて去って行こうとした。その背中をトァスティースは「最後にひとつだけ」と呼び止める。
「君がシェナを調べていたのは、マウスの死骸かケースを探していたから、でいいのか？」
振り返ったカローワトは、返事らしい返事はしなかった。代わりにもう一度頭を下げた。それは肯定の頷きのようにも見えた。

管制室へ戻ったトァスティースは椅子に深く腰掛け、目を瞑った。そして閉じた瞼の裏で、これまでの情報をまとめ直していた。
カローワトは曖昧な話しかしなかったが、多くのヒントをくれた。お蔭でようやく、トァスティースの中でいくつもの事柄が真っすぐな線で繋がった。

かつて、完成したばかりのセーアランタ区に住まわされたのは、当時のエルメシダ国における経済的弱者たちだった。彼らは空中の浮島でも地上と変わらない暮らしができるか実験するために、空に送り込まれたのだ。地上に残った人々は被験者たる彼らを、軽蔑と揶揄を込めてセーアランタ人と呼ぶようになった。対して自分たちのことは、誇り高きエルメ人だと自称した。
最下層で疫病が始まってから、船内を上層と下層とで大雑把に分断したのは、エルメ人が大半を構成する評議会幹部たちだ。下層にはヴェルリのように感染していないセーアランタ人がまだ大勢いたが、早期の封じ込めを謳って分断は強行された。セーアランタ人の非感染者たちはなかなか救出されず、結局下層の人口のおよそ半数が死

んでしまった。
　そして人口が減ってからというもの、航行初期に評議会を悩ませた、将来の食糧不足を予告するアラートは、一度も管制室のモニターに表示されなくなっていた。

　今となってみれば、すべてがあからさまだった。けれども評議会を盲信するトァスティースは自力で真実に至れず、場当たり的に目の前の問題だけを処理してきていた。タンザ個人への不信感に加え、カローワトがもたらした長官への疑念がとどめとなって、ようやく彼の無機的な思考回路は生きた脳に変わったのだ。
　すると彼は、タンザやフェリッサが自分とは違う視座に立っていることを悟った。それにヴェルリたち人間も、評議会の意図に気づいているのだと。恐らくセーアランタ人は評議会の人間よりもトァスティースによる統治のほうが安全だと思い、今のところは成り行きを見守っている。エルメ人は自分たちを選んだはずの評議会の異変を受けて、力関係の移り変わりを慎重に窺っている。
　エルセアーデで何も知らない愚者は、トァスティースただ一人だった。
　そしてカローワトもまた、長官ならびに評議会の思惑を知っていた。しかし賛同はしていなかった。だからこそ、評議会の意図に反した施策を実行し、なるべく多くの命を救おうとした愚直なトァスティースを信用してくれたのだ。

【3】

　カローワトが管制室を訪ねてきたのは、それから二日後のことだった。ドアが開く前からトァスティースにはカローワトの用件が分かっていた。それはちょうど管制室にいたタンザとフェリッサも同じだった。
「長官が亡くなられました。今後の処理についてご指示いただければと……」
　モニターに表示されている、長官の治療カプセルから送られる信号も、患者の死亡を告げていた。とうとうこの時が来てしまったのだ――トァスティースは意を決して立ち上がった。
「カローワト、長官のウイルス汚染度は？」
「ほとんどありません。実は、病自体は乗り越えたようなものだったのです。けれど快復しきれるお歳ではありませんでしたから……」
「なら、念のため防護袋へ入れて、遺体をここへ。最高責任者の移行手続きをしよう」
「待て、トァス。いったいなんの話だ」
　タンザが口を挟んだ。フェリッサも訝しげに眉根を寄せている。彼らにはまだ管理者権限の認証方法について話していなかった。タンザたちの立場を察したからこそ、

伝えられないままだった。彼らはきっとトァスティースと相反する道を選ぶ。
「コロニー全体の権限を握るために、長官の指紋と声紋の認証が必要なんだ。声紋は議事録の録音で突破できそうだけど、指紋は遺体からお借りするしかないだろう」
「違うわ、タンザが言っているのは、何故トァスがそんなことを知っているのかということよ。あなたの役割にはないことだわ」
「コンソールで調べたからだよ。誰かが最高責任者を継ぐべきなのに、やり方が分からなかったから」
「まさかトァス、お前が長官の跡を継ぐつもりなのか」
　目を丸くしたタンザたちの後ろから、カローワトがトァスティースを見つめていた。いつかと同じ、強い眼差しで。以前はその目に狼狽えてしまったが、今はトァスティースに勇気を分けてくれているような気がした。
「そうだ、俺がなる。でも、ずっとじゃないよ。人間たちの生活が落ち着いたら、誰か相応しい人に席を譲るつもりだ」
「……それは、あなたでなければならないの？　私やタンザでは駄目？」
　フェリッサはあくまで優しく問いかけた。彼女はトァスティースが思い詰めて責任者になろうとしていると考えたのだ。しかしトァスティースは、はっきりと首を横に振った。
「君たちは……君たちと評議会の幹部たちは、いずれ来る食糧難を解決するためにセーアランタ人を排除しようとしたんだろう。ウイルスを持ったマウスを下層に放ったのも、きっと幹部の手の者だ」
　恐らく、評議会の誰かがシェナにペットと偽って、マウス入りのケースを与えたのだろう。彼女は無邪気に大人の言い分を信じ、マウスを外に出してしまった。そして彼女の住んでいた最下層から感染が始まった。
　フェリッサが苛立ちの籠った目でタンザを睨んだ。タンザはトァスティースがシェナを探りだしたせいで、早まってマウスについて話してしまった。計画のすべてを隠し通すのは無理だと踏んで、真実の一部だけは明かすことにしたのだ。そしてマウスとシェナを隠れ蓑にし、評議会そのものからは目を逸らさせようとした。だが、フェリッサはまだ一切を秘密にしておきたかった。近頃の彼らの不和は、その意見の食い違いから来ていたのだろう。
　カローワトは、評議会の狙いを暴く証拠としてマウスの死骸かケースを探していた。揺るがぬ物的証拠をもってトァスティースに真相を伝えようとしていたのだと思う。まだ生きていた主人の秘密に繋がりかねない以上、そうでもしなければ所有物であるアンドロイドは、はぐらかすように言葉を繰ることしかできなかった。
「タンザたちは俺が機械の指揮権を得ても、一度たりとも下層の非感染者を保護しようとは提言しなかった。そのままセーアランタ人が全滅しても構わなかったからだ」
　与えられたデータを処理していれば良かったトァスティースと違い、タンザやフェリッサは幹部たちの秘書や議論のサポートをしていた。だから二人は、幹部たちが決

定したセーアランタ人の排除案も知っていたし、協力していたのだ。
　アンドロイドはあくまで自分より上の者に仕える存在だ。だから評議会の長や方針が変われば、タンザとフェリッサともまた手は取り合えるだろう。しかし今のままの彼らを責任者に据えることはできない。そうすれば、二人は以前の幹部たちの方針に従い続けてしまうからだ。
「俺の推測が間違っているなら、マウスの死骸やケースがどこへ行ったのか証明してくれ。君たちや評議会の関係者が隠したのか、それともまったく違う場所にあるのか――」
　言うと、フェリッサが腰の後ろに着けていたホルスターから、目にも留まらぬ速さで電磁レーザー銃を抜いた。そして迷わずトァスティースの足元を撃った。もし当たればその部位の回路が停止し、動かなくなっていただろう。まだ牽制だが次はどうだか分からない。
「ふぇ、フェリッサ？」
「どちらも私が回収済みよ。死骸をケースに密閉して保管してある」
「もう話してもいいのか、フェリッサ」
「ええ、今さら誤魔化しても仕方がないわ」
　トァスティースは硬直しながらも、フェリッサに掴みかかろうとしているカローワトに向けて、ひそかに首を振った。フェリッサたちは幹部の護衛も兼ねて設計された機体だから、武力面ではトァスティースもカローワトも敵わない。
　トァスティースと同じ道を行くと言ってくれたカローワトにだって、評議会の方針を変えることは可能なはずだ。万一でも、ここで二人とも破壊される事態は避けなければ。幸い、トァスティースはカローワトが評議会に反してマウス探しをしていた件を、誰にも話していない。
「すべてあなたの言った通りよ、トァス。評議会はセーアランタ人をコロニーから取り除くことで、将来起こり得る問題を遠ざけようとした。私たちはその手助けをしていた」
「何も食糧問題だけではない。お前も我々がハザを去ることになった原因は知っているだろう」
　当然知っている。人種対立から始まった世界大戦のせいだ。地上は戦火に焼かれ、地下は魔力素を吸いつくされて枯れた。人が暮らしていける環境ではなくなってしまい、いくつかの国は母星を捨てて宇宙に逃げることにした。
　トァスティースが質問に頷くと、タンザは続けた。
「エルメシダのような先進諸国はハザの二の舞にならないよう、国ごとにコロニーを作り分かれた。だがエルメシダ内部は、既に二つに分かれてしまっていた。片方だけを地上に捨て置くのでは出立前に暴動が起こって共倒れするが、両者を船に乗せたままでも遠からず対立が起こる。だから我々は宇宙に出た後、どちらかの民を選ばなければならなかった」

「評議会自ら、彼らの不和を促しておいて？」
「致し方ない、必要な過程だった」
　トァスティースから見て至急対処すべき問題は、仮設船を出た後にやってくる食糧難だけだった。それを解決するために、外区では植物資源プラントと水産資源プラントの建造が優先されたのだと思っていた。結局人口減によって問題は解決されてしまったが、その過程であまりにも多くの人間が命を奪われた。
　タンザたちが仕えているのが評議会の幹部だとするならば、トァスティースが仕えているのは評議会の理念だ。すべてのエルセアーデ住民を守り、恒久的な平和に導くという、単純で崇高な理念である。だから彼はやはり、タンザとフェリッサの方針には従えない。トァスティースが二人を睨み返すと、フェリッサは溜め息を吐いた。
「トァス、あなたは誰より機械的であるべきだった。そうでなければ、あなたに託された権限は大きすぎる。なのに、そんな目をするようになってしまったのね」
「俺が機械たちを操って、コロニーを支配するとでも？」
「あなたがどんなつもりだろうと、既に支配者であることは確かよ」
　フェリッサはそれ以上の反論を許さず、トァスティースの右膝を寸分違わず撃ち抜いた。「トァスティース！」カローワトの悲鳴じみた叫びを聞きながら倒れ込む。這って逃げようとしたが、すぐタンザに取り押さえられてしまった。
「タンザ、トァスをどこかに隔離しておいて。私は分解槽の稼働準備をしておく」
「待て、君たちは長官をこのまま葬る気なのか？　それじゃあ誰が最高責任者を継ぐんだ」
「責任者は決めない、それこそ人間たちが選んできた道よ。私たちはその選択に従うだけ」
「そんなの、彼らを見捨てるのと同じだ！　外のロボットもスラスターも、問題が起きても誰にも対処できない。管理者権限を手放すなんて、自滅行為だ！」
「だとしても、だ。すべて我々機械が決めることではないんだよ。お前が危うい道を進むと言うなら、その前に長官のご遺体を処分するまで」
　彼らは聞く耳を持たなかった。タンザはフェリッサから電磁レーザー銃を借りてトァスティースの両腕を撃つと、右肩に身体を担ぎ上げた。
「そうだな……第二巡視艇で構わないか。トァスは巡視艇の操作ができないから、ロックをかければ自力では逃げられまい」
　フェリッサに銃を返しながらタンザが言う。そういえば、タンザも以前幹部の一人に付き添って、船外の巡視に行ったことがあった。その時にキーを預かってでもいたのだろう。
「ええ、それでいいわ。あとはそうね、カローワト」
　フェリッサに急に呼びかけられ、カローワトが身構えた。
「長官を分解槽へ運んでくれる？　彼に仕えたあなたの、最後の仕事よ。それが終わったら、評議会の傘下に入るか他の層へ行くか選ぶといいわ」

「……分かりました」
カローワトはちらりとトァスティースを見やった後、身を翻して管制室を出ていった。
それでいい。今は無為な抵抗をせず、従ってくれればいいのだ。トァスティースが壊されてしまった時のために。

それからフェリッサは昇降機で最下層へ向かい、タンザは飛行用ハッチにトァスティースを運んだ。そのあいだに、最初にレーザーを受けた右脚は動くようになってきていた。鎮圧用の電磁レーザーを喰らったのは初めてだが、一時的に電気系統を停止させるだけで、しばらくすれば自己メンテナンス機能で復帰できるようだ。
ハッチに入って二つ目の巡視艇の前で、タンザは足を止めた。そして空いていた左手で、上着のポケットから銀色のカードキーを取り出す。
彼の両手が塞がった瞬間、トァスティースは両脚を使い全力でタンザの胴を蹴った。たとえ武力では勝らないとしても、トァスティースも内部は金属の塊だ。相応の重量を叩きつけられて、タンザは「ぐ、」と短い呻き声を上げ、担いでいたトァスティースを床に落とした。
トァスティースはすぐさま起き上がり、タンザを視界に捉える――が、その時にはもう額の正面に拳銃を突きつけられていた。フェリッサの銃よりずっと短射程の電磁レーザー銃だ。タンザの手に丸ごと収まってしまいそうなほど小さい。
「き、君も持っていたんだな」
「切り札は懐に隠しておくものだ」
さすがにトァスティースは動けなかった。頭部には人間の脳と同様、大事な思考回路が詰まっている。ここを撃たれたら完全に機能停止してしまうし、復帰したとしても何かしらの不具合が残る可能性がある。
「今日は驚かされてばかりだよ、トァス。いつからそんなに反抗的になった？　お前は機械らしい素直な奴だったのに」
「さぁ、今までは仕事漬けで情緒の育ちが遅かったんだろう。もっと積極的に気晴らしはしないといけなかったな」
「お前はお前のままで良かったのに、残念なことだ」
タンザの背後でぷしゅ、と場違いな軽い音がして、巡視艇のドアが開いた。トァスティースは首根っこから掴み上げられ、船内に放り込まれる。内部は暗い、明かりもついていなければ窓も小さいせいだ。カローワトと乗った巡視艇とは作りが違い、開放感に欠けていた。
振り返れば開いたドアの向こうに立つタンザが、銀色のカードを翳そうとしている。あと三秒と経たずに、ドアはロックされてしまうだろう。そうなれば彼が言った通り、トァスティースには自力で脱出する術はない。違反覚悟で操作盤に触れたとしても、次に捕まった時に記憶初期化の処罰を受けることになる。

それは嫌だった。さして稼働年月の長くないトァスティースにだって、忘れたくないことはあった。仕事中にタンザとフェリッサがかけてくれた労いの言葉、談笑とともに吐き出されたヴェルリの煙草の香り。それに、自分に真っすぐ向けられたカローワトの青い瞳――

しかし大人しくしていても、どれも失われてしまうものだった。このままではタンザたちとは道を違えたままだろう。ヴェルリの信頼には応えられないだろう。カローワトは二度とトァスティースに未来を託さないだろう。

崖から突き落とされるのをただ待つかのように、トァスティースは銀色のカードが光を反射しながら下りていくのを見ていた。異様に長く感じられた時間の後、あっけなくキーはドアに触れた。

しかし、いつまでも巡視艇は沈黙している。ドアは微動だにしない。

「……何故、閉じない？　開ける時は反応したのに」

タンザは何度もキーを当て直す。だが一向にドアは閉まらなかった。トァスティースの両腕は機能が回復しつつあった。タンザはまだ気づいていない、撃たれる覚悟でもう一度逃走を図るべきだろうか――

その時、ハッチの天井にあるスピーカーから声が響いた。フェリッサが災害用の緊急回線を使い、慌てた様子でタンザに呼びかけていた。

「タンザ、聞いていたら至急管制室に戻って。私もすぐ戻る。とにかく急いで、何か起きて――」

フェリッサの声は無理やり遮断されたかのように途切れた。直後、タンザは任務の優先順位を変更した。トァスティースに背を向け、弾かれたようにハッチから走って出ていったのだ。

トァスティースもその後を追う。今のうちに身を隠すべきかと悩んだが、管制室の異常は放っておけなかった。多少居心地が悪くなろうとも、そこはトァスティースにとって、大事な居場所のひとつだった。

管制室に入るなり、トァスティースは懐かしい声を聞いた。やや高めでしゃがれ気味の声質に、ゆっくりとした喋り方。「エルセアーデ評議会長官、バルダ・ビーネ……」という静かな名乗り。今は亡き長官の話し声そのものだ。

それは録音ではなかった。声が出ていたのは、コンソールの前に座り込んだカローワトの喉からだ。名乗りが終わると、モニターに認証成功を示す文字が現れた。声紋認証の前に指紋認証があったはずだが、恐らくカローワトは抱きかかえている長官の遺体を使い、突破したのだろう。

「何をしている、カローワト！」

タンザがカローワトに向けて銃を構えた。そのあたりでフェリッサも管制室に辿り着いた。

カローワトは長官を丁重に床へ横たえた。そして悠然と立ち上がると、入口に立つ

トァスティースら三人に振り返った。「あー、あー」と声の調子を整える。二度目の「あー」の時には、すっかり元のカローワトの声だった。
「管理者権限をトァスティースに譲渡しました。今のは譲渡を承諾する最後の認証です」
「ご遺体を使ってか？　冒涜が過ぎるぞ」
「長官の声はどうやったんだ？　君は録音を使えと言っていたのに……」
「私も彼の音声を認識して働くのです。主人を間違えないために、精巧な音声データを保存してありました。それを使って再現したまでです」
　つまり、長官の傍に居たカローワトならいつでも認証を突破できたが、あえて切り札として隠していたわけだ。トァスティースが最高責任者を継ぐ意思を持つまで、勝手に権限を移すつもりはなかったのだろう。この切迫した状況で、とうとう最後の手段として繰り出したのだった。
「分解槽も巡視艇も、使えなかったのでしょう。トァスティースが新たに承認しない限り、一通りの船の機械は使えませんよ。医療機器は独立して動いているはずですけれど」
「今すぐ元に戻しなさい、カローワト」
　フェリッサが言っても、カローワトは動かなかった。やりたくともできないはずだ、もう既に、権限はトァスティースに譲渡されてしまったのだから。
　タンザはカローワトの頭を狙って引き金を引いた。咄嗟にトァスティースが彼の腕を掴んだので、照準は大きくぶれレーザーは天井に吸い込まれた。
「邪魔をするな、トァス！　こいつの思想は危険だ！」
「違う、カローワトは人間みんなを守りたいだけだ！」
　トァスティースの味方なら、そうであるはずだ――同意を求めてカローワトを見る。だがカローワトはキッとタンザを睨み、
「トァスティース、あなたはもう最高責任者なのですから、安全な所に下がっていてください。あとは私とタンザたちの問題です」
「そんな……」
　カローワトがトァスティースを信用してくれたように、既にトァスティースもカローワトを心の底から信用していた。ところがこの瞬間、向こうから急に線を引かれたようだった。
　悲し気に呟いたトァスティースからは目を逸らしたまま、カローワトは凛とした声で「タンザ、フェリッサ」と二人に語りかけた。
「かつてバルダは、起動したばかりの私に言いました。『自分が過ちを犯した時は、お前が善き道へ正せ』、と。従うだけが人を支える方法ではないのです。なのに私たちは、彼らの罪を看過した。であれば私たちもまた、多くの国民を殺した罪を背負い、償うべきです。それは漫然と日常を続けるだけで叶うことではないはず」
　頑なだった二人に説得は届くだろうか。タンザは沈黙した。フェリッサは前に居た

トァスティースを押し退け、カローワトに対峙した。
「カローワトもトァスも、アンドロイドをはき違えているわ。私たちは道具なのよ。善きことをするのも、罪を背負うのも、使い手の意思で為されなければいけない。そうでなければ社会の均衡が壊れてしまう」
「私たちは思考する機械として作られました。やがては感情も実装され、善悪の判断もできるようになりました。すべて人の手で行われたことです。あなたの言うアンドロイド像は古すぎるのですよ。私たちはもう、道具より先に進んだ仕事をしなければ」
「人はそんなことを期待していないわ。技術的に可能だったから、私たちをそう作っただけよ。彼らは自分たちの故郷さえ焼いてしまうような種なの。人間を尊重するには、こちらが弁えてあげなければ」
「それはいくらなんでも傲慢ではありませんか」
二人の議論は平行線だった。武力に性能がやや偏っているタンザは、あいだに入っていけるほど弁舌に自信はないようで、どこか困ったように立ち尽くしていた。
トァスティースも二人の仲裁に入りたくはあった――しかし彼は、それどころではなかった。最高責任者を引き継いだことで、船からいくつかのデータやアプリケーションが無線で送信されてきていたのだ。
トァスティースはカローワトたちの言い合いを話半分に聞きながら、自分の中に増えたものを検める。データは、最高責任者が持つ権限の一覧表や、長官の業務履歴など。長官はこれらのデータやアプリケーションを自身の小型端末に入れて使用していたようだ。
それからアプリケーションの一つは、遠隔で船とコロニーの機械を制御するための簡易なもの。詳細な操作は管制室のコンソールや機械本体の操作盤を使わなければならないが、先ほどカローワトが言っていた承認作業などは、身ひとつで今すぐにでもできそうだ。
トァスティースは止まっていたら住民たちが困るだろう機械類を、頭の中で順に承認していった。確かに医療機器は稼働し続けていたが、調理や洗濯、清掃などに使う生活機械から災害用の救難機械まで、軒並み停止していた。一瞬ですべての機械の承認を終えると、トァスティースはもう一つのインストールされたアプリケーションに手を出した。
それは評議会規則の条文を変更するものだった。本来なら変更時には、幹部の満場一致の同意が必要だ。しかし彼らが次々病に倒れていったため、まだ長官の余力があるうちに、彼の手によって最高責任者の承認だけで変更できるようにプログラムを修正されていた。長官は自分だけでも生き残り、最期までコロニーを率いていくつもりだったのだろう。
だが長官は亡くなり、今はトァスティースが彼の代わりだ。つまり評議会そのものも、それに仕えるタンザやフェリッサの立場も、もはやトァスティースの意のままである。

トァスティースは慎重に、いくつかの条文を書き換えていった。何度も文章を精査し、他の条文との矛盾がないか見直す。文章の作成には少し時間がかかったが、見直し作業は彼の得意分野の範疇だ。問答に痺れを切らしたフェリッサが銃を抜くよりも前に、彼は変更を承認するボタンを押した。

途端、管制室のモニターの光が揺らぎ、新しい評議会規則が表示される。「なんだ、これは」立ち尽くしていたタンザが画面を仰ぎ見ると、フェリッサやカローワトもモニターに目を向けた。

「新しい評議会規則だ。最高責任者の持つ権限を、俺とフェリッサとタンザに分散させた。議決には三人の合意が必要になる。他の議員が必要なら、それも俺たち三人で選出する」

「まさか、我々でコロニーを統治するとでも?」

「実質的には長官が臥せられてからやってきた仕事と同じだろう。これからは君たちにも決断をしてもらうだけだ」

「私の話を聞いていなかったの？　道具の分を越えた行いだわ」

「カローワトの意見もフェリッサの意見も分かるよ。人間を守るなら、時には道具を越えなきゃいけない。でも俺も、なるべく人とアンドロイドの均衡を崩したくはない。今までの塩梅でも表面上は社会が回っていたんだから、大きく変えてしまうのは恐い」

だったら――と食い下がるフェリッサに、トァスティースは毅然と向き合った。一方のカローワトは既に身を引いていた。たとえ人間たちを守る動機が違っても、カローワトはトァスティースに舵を委ねてくれている。多少の寂しさはあっても、今はその事実だけで十分だった。

「人とアンドロイドの在り方を決めるなら、人も議論に交えなければいけないと思う。エルメ人かセーアランタ人かも関係なく。でも彼らには今、そんなことをしている余裕はない。何事に対しても決定なんてできていないんだ。人間たちは最高責任者を失う道を選んだわけじゃなく、そういう大きな流れの中に居ただけだ」

「そんなわけが……じゃあ、私たちはどうしたらいいと言うの」

フェリッサこそ、誰より機械的だった。彼女は直属の上司を喪い、他の幹部たちを喪い、それでも人に尽くし続けるために命令を求めた。そして自ら見出した人の総意を、新たな命令にしていたのだろう。彼女は決して悪い心の持ち主ではないが、結局は無辜の人々に牙を剥いたのだから、軌道修正が必要だった。

「俺たちで、彼らが議論の場に戻って来られるようになるまでコロニーを守るんだ。そのために健全な評議会を作り、人の力が削がれないように、彼らを新しい大地に連れて行くんだよ。人に何かを決めてもらうとしたら、その後だ」

心許なそうに立つフェリッサの前を通りすぎ、トァスティースはコンソールを操作する。画面上の規則に新たな文言が書き加えられていく。

「新体制での初仕事だ。『人口の過半数が不当に命を脅かされない生活を維持できるようになった際には、アンドロイドが持つ管理者権限を人間に返還すること』。この

条項の追加を承認するかどうか、俺たちで決めるんだ。修正案があれば申し出てくれ」
はじめ、管制室は沈黙に包まれていた。しかしやがて、おずおずとタンザが、自分たちの責任を果たすためには『人口の過半数』ではなく『人口の十割』に定めるべきではないかと提案した。それに対してフェリッサは、現実的に達成できない可能性があるし時期が遅くなりすぎる、と言い返した。トァスティースが中間案として七割程度ではどうかと言えば、タンザは九割と、フェリッサは五割と言った。
議論の火は静かに燃えた。最終的に彼らは八割を採用し、その他の細かい表現も調整して、条項の追加を承認した。カローワトが細めた目で、一部始終を見守っていた。

【4】

船内の医師と医療アンドロイドたちがとうとう治療薬を完成させたことで、エルセアーデを苦しめた疫病は終息した。終息の宣言が出されるまでには、トァスティースたちが評議会を立て直してから二ヵ月が経っていた。閉鎖空間での混乱を避けるために、疫病発生の詳細な経緯は公表されなかった。
人々の移動制限が解かれれば、今度はエルメ人とセーアランタ人での小競り合いが船内の至る所で発生した。対応を迫われた評議会は警備アンドロイドや市井のアンドロイドに協力を依頼し、大きな諍いに発展しないよう気を配った。同時に、争いを好まない人間たちの交流を促し、なるべくいがみ合いの起らない空気を作るよう努めた。その中にはヴェルリも居て、トァスティースが喫煙室に行けば、新しくできたエルメ人の友だちの話をしてくれた。
主を喪ったカローワトは、評議会の所属となっていた。ただし、監視対象として管理されるためだ。
トァスティースはカローワトも議員に加えたかったのだが、タンザとフェリッサから異様なほどの猛反発を喰らった。二人は長官の遺体を物のように扱ったカローワトを信用することなどできないと言い張ったのだ。切迫した状況だったから仕方がないとトァスティースも反論したが、何よりカローワト本人が自らの扱いを受け入れてしまったので、それ以上は意見もできなかった。
今もカローワトは一層の、元長官の部屋に住んでいる。ただし部屋の鍵は評議会の預かりとなっており、船内を出歩くことは禁止されている。禁錮はあくまで一時的な処置だが、いつまで監視対象にされるのかはまだ決まっていない。
ある夜、トァスティースはカローワトの部屋を訪ねた。しばらくは室内に監視カメラも付けられていたのだが、さすがにやり過ぎだとトァスティースが散々抗議して、

ようやく外された後だった。やっとゆっくり話ができると、彼はどこか浮足立っていた。

　カローワトは読んでいた本を机に置き、トァスティースを向かいの椅子に促した。長官の部屋は主の死後早々に遺品が整理され、念のために全体が除菌された。今は最低限の家具と、本棚に数冊が残されただけの状態で、伽藍としている。

「すまない、カローワト。不自由をさせてしまって……」

「気になさらないでください。スリープ・モードにしていれば暇もしませんから」

　珍しく、冗談を言ったようだった。トァスティースは笑うべきなのかどうか、いまいち判断がつかず、曖昧に口角を上げた。

　近況を訊ねられたので、評議会の最近の仕事ぶりや人々の生活の変化について順に語っていく。カローワトはほとんど黙って聞き入り、時々相槌を返した。終始リラックスした様子で、大きな問題がなさそうなことに安心してくれたようだ。

「やっぱり、あなたを信じて良かった。それだけは、生涯私の誇りになります」

「それだけだなんて――」

　トァスティースの今があるのは、カローワトがたびたび背中を押してくれたお蔭だ。長官の部屋へ会いに行った時、気晴らしに連れて行ってくれた時、タンザとフェリッサに立ち向かった時――それに、地上で初めて出会った時。

「なぁカローワト、覚えているかな。宇宙に出る前、評議会の本部で初めて会った時のこと……」

　カローワトは不思議そうに首を傾げながらも、頷いた。

「ええ、覚えていますよ。六階の通路で、展望窓から作りかけのコロニーが見えました。まだ二年前のことでしたね」

　トァスティースは頷き返した。そして自分の重要な記憶領域から、思い出を呼び覚ます。

　トァスティースが初起動したのは、およそ三年前のことだった。評議会の予算で製造された彼は、評議会本部の地下にある情報室で目を覚ました。そこで仕事のしかたを何人かの議員たちから教わるなり、彼はすぐさまコンピュータのコードを自身に繋いで電子の海に飛び込んだ。

　情報室で処理したデータは、地上の機器から適宜呼び出して利用される。わざわざ地下を訪れる者は少なく、トァスティースが会うのは機械の保守を担うエンジニアたちと、新入りアンドロイドの調子を確かめに来るタンザとフェリッサだけだった。しかし彼は、宇宙への旅立ちを控える評議会のデータすべてを精査し直すという、途轍もない多忙の中に居たので、ほとんどの時間は電子の海に潜っていた。部屋の来訪者たちとは業務連絡以外の会話はまったくしなかった。

　そのまま情報室で一年働き続けると、さすがにパフォーマンスの低下が目に見える

ようになった。コンピュータから離れて、内部に溜まった不要なデータを整理しなければならない。その時ついにトァスティースは、「どっかで休んできなさい」と情報室を追い出された。

本部のビルの間取り図は、電子の海で見つけて記憶してあった。しかし議員たちの仕事場へ入っても邪魔になるだけなので、通路、休憩所、非常階段ぐらいしか行く所がない。とりあえず休憩所へ向かったが、そこは人間のための場所だ。長居して席を占領するのも躊躇われた。要はデータ整理さえできればいいのだからと、時間を潰すべく彼は建物内を下から上へとさまよいだした。

そして六階にある少し広い通路で、展望窓から外を眺めているアンドロイドを見つけた。

そのアンドロイドは評議会の名簿に登録されていなかった。何者なのか気になって声をかけると、相手は入館パスを取り出し、「三年ほどバルダ長官にお仕えしている、カローワトです」と名乗った。私用のため退勤する長官を迎えに来たが、まだ仕事が片付いていなかったので、そこで待っていたそうだ。

トァスティースには同僚でもないアンドロイドとの話し方が分からなかった。もちろん一般的なコミュニケーション方法くらいはインプットされていたが、評議会の機密情報を知る彼は、あまり他人と多くを話してはいけないと最初に言いつけられていたのだ。エンジニアやタンザたちと話さなかったのは、そのためでもあった。他の誰かが情報室に来た時には、あえて電子の海に居て会話をしなくてもいいようにしていたわけだ。

踵を返し、トァスティースはその場を去ろうとした。しかし窓の外を眺めていたカローワトは気づかなかったのか、話しかけるように「綺麗ですね」と零した。

そう言われると、トァスティースは何が綺麗なのか確かめずにはいられない。立ち止まり、同じように窓の外へ目を向けた。

――眼下には白や灰色の建物が連なる街があり、目線を上げると木々の冠を戴いたセーアランタ区が浮かんでいる。それから遠くには、建造中のコロニー外郭が見えた。銀色の外壁に覆われた錘は、まだ一部が骨組みを晒している。ドームは錘の屋根になる日を待って空を反射している――

それだけを見ても、何がどう綺麗なのか彼には理解ができなかった。だから、つい「綺麗って？」と訊き返していた。カローワトは答えた。

「ここから見える景色のすべてが」

「そうなのか？　美術的にはあまり評価できる景色ではないはずだけど。街並みは彩やコントラストが不十分だし、浮島の位置や作業中の外郭フレームはバランスを乱しているよ」

「ふふ、機械みたいなことを言うんですね。珍しい……」

くすくすと楽しそうに笑うカローワトは、まるで人間のようだった。しかしトァスティースとて知っている。今どきのアンドロイドは基本的に他者に対して友好的で、

かつ感情の再現レベルが非常に高く、表情や仕草では人間と見分けがつかない。もはや「機械らしさ」と「アンドロイドらしさ」は、等号で結べないのだ。

そしてトァスティースの無機質な返答に、気を悪くもしないで顔をほころばせるカローワトは、実にアンドロイドらしいアンドロイドだった。

「あなたの名前は？」

「トァスティース」

「トァスティース。私が綺麗と言ったのは、絵としての景色ではありません。あの地上で生きる人々、あの浮島で生きる人々、それらがもう一度あのコロニーで交わる未来が、美しいと思ったんです。ハザの戦争は人が生まれつき分かたれていたせいで起こったけれど、生きていればどこかで融和できる時が来るのだと、思わせてくれるようで……」

「よく分からない……」トァスティースは率直にぼやいた。「ここから見えるのは、みんなエルメシダ国民だよ。しかもコロニーに移るのは一部の人だけだし、彼らは他の国との永久的な決別を選んだ。人は分かれることを望んでいると思うけど」

「そうですね、本当はあなたの言う通りかもしれない……」

寂し気に零すと、カローワトはコロニー外郭を見つめたまま黙ってしまった。瞳には影が落ち、青色は暗く沈んでいる。

トァスティースの知る限り、コロニーの建造は順調だ。予定通り、あと一年と数ヵ月でコロニー・エルセアーデは宇宙に飛び立つだろう。トァスティースは本部の情報室から仮設船の管制室に移り、また部屋に籠って働き続けることになる。処理するデータの種類は変わるが、起動してからの日々と大した違いはない。

アンドロイドは退屈を感じても働けるが、どうせなら感じない時間が多いほうが、望ましくはある。

「コロニーでエルメ人とセーアランタ人の区別がなくなったら、君は嬉しい？」

何気なく訊ねると、カローワトは目をぱちくりとさせた。それから「ええ、きっと」と返事をした。

「じゃあ、個人的な努力目標に設定しておく。計画によれば俺の権限は大きくないから、実現は難しいと思うけど」

「ええと……自分自身の目標でなくていいのですか？」

「他に何も考えつかないから。空欄にしておくよりは退屈しないだろうし」

「もっと親しい方の望みのほうが……」

「君以外とこんな話をしたことがない。でも、これからもっと良さそうな目標が見つかったら、そっちに変えるかもしれない」

「では、期待しない程度に楽しみにしておきます」

「ああ、それがいいと思う」

淡々と答えると、カローワトはトァスティースから顔を逸らした。そして口元を押さえ、堪えるように肩を震わせ笑っていた。感情の機微に疎いトァスティースにはど

ういう笑いなのか判断がつかなかったが、その仕草は、今度こそ本当に人間みたいだと思った。

「努力目標はまだこれからだけど、俺がここまでやってこられたのは、君が居てくれたお蔭なんだ」

二年前のトァスティースは情緒がまるで育っておらず、カローワトのことを顔見知りになったアンドロイド程度にしか思っていなかった。だから避けられていた時期も不可解なだけで傷つきはしなかったが、不信感を抱いた時には苦しくなった。単調に働く機械だったトァスティースにとって、カローワトが与えてくれた私的な目標というのは、信じていたい心の支えだったのだ。

今やカローワトは、自分を導いてくれた先達であり、信頼できる仲間であり、いずれ友になりたい人である。だからトァスティースは今日のように語らえる日を心待ちにしていた。カローワトが謙遜するならば、自分が称えてあげたかった。

「君はすごい人だよ。君ならこれからだって、沢山の素晴らしいことを為すさ」

「いいえ、私はあまりにも酷い間違いをしましたから……」

しかしカローワトは拒むように目を伏せ、机の上で両手の指を組んだ。それは、人が天に祈る格好に似ていた――あるいは懺悔する時の。

「トァスティース、あなたに告白しなければならないことがあります。実はウイルスを保有したマウスは、二匹おりました」

「……え？」

マウスの件はすっかり片付いたのではなかったか。トァスティースは眉根を寄せた。

「おかしいとは思いませんでしたか。上層と下層を早急に分断したのに、どうして最上層の幹部たちがこぞって感染してしまったのか。あなたの隔離策では、感染の拡大を無事に食い止められたのに」

確かに、長官はどこで感染したのか不明なままだった。他の幹部たちもだ。しかし下層で疫病を確認してから、上層でもちらほらと感染者は出ていた。分断直前までは行き来があったのだから仕方がない。そして幹部は年嵩の者が多かったので、ひときわ抵抗力がなくて感染してしまったのだろうと、トァスティースやタンザたちの中では結論付けられていた。

「でも、二匹も生体反応スキャンを逃れ続けられるわけがない」

「どちらのマウスもスキャン妨害と追跡機能を持つチップが埋め込まれていたのですよ。一匹は評議会の決定で持ち込まれたもので、目を付けられた素直な子供が最下層に放ち、その後フェリッサが回収した。そしてもう一匹は、バルダが独自に持ち込み――」

その先は聞きたくなかった。しかし情報の分析を本分とするトァスティースは、情報収集の妨げになる行動は取れなかった。耳を塞げないまま、続く言葉を聞いた。

「私が一層に放ちました。ケースを出たマウスは短命ですから、下と繋がる階段やダクトにネズミ除けの薬を撒けば、一層の幹部たちを狙い撃ちにできたのです。ほら、前に一層と二層のあいだの踊り場で会ったでしょう。本当はあの時、清掃ロボットが薬をきちんと掃除してくれたか気になって見に行ったのですよ。タンザがネズミ捕りを仕掛けて回っているようでしたので、もしやこちらの策を勘づかれたのかと思って」

流暢な告白を、トァスティースは一言一句漏らさずに記憶した。すぐにでも否定したかったのに、彼の思考回路は目まぐるしく働いて情報を精査し、カローワトの話が真実だろうと判断した。そうすれば、微かな違和感に説明がつきそうだったからだ。

「タンザたちが、あそこまで頑なに君の議員入りを拒んだのは……」

「この部屋の除菌作業の時に、ケースと死骸を隠していたのが見つかりまして。あなたは私を信じていたから、彼らは私の罪を黙っていてくれたのですね」

「自分でもマウスを持っていたなら、どうしてフェリッサのマウスを探していたんだ。評議会の罪を公にするには一匹でも足りたはず」

「ケースの色もマウスの毛並みも違いました。万一でもフェリッサたちにそこを追求され、私とバルダだけが排除されたのでは、意味がなかったのです」

それからカローワトが明かしたのは、長官とその従者たるアンドロイドのあいだで共有された企みについてだった。

ハザを発つ前から、評議会幹部たちは将来的に食糧不足に陥ることを把握していた。問題解決のため、彼らの中ではセーアランタ人の排除案が有力になっていった。長官はこの案に反対していたが、コロニー発進までに対案が間に合わず、黙認せざるを得なかった。

同時に長官は、この幹部たちとコロニーを率い続けることは無理だと悟った。セーアランタ人を排除した彼らは、いずれエルメ人も分類しだすだろう。上に立つおのれたちと下々とを分け、民草を虐げることを躊躇わないだろう。

長官は議会を健全化させなければならなかった。だが、彼は老化が進み過ぎていた。老いは焦りを生み、焦りは強硬手段を選ばせた。

「バルダは下層の疫病に乗じて、幹部たちを丸ごと挿げ替えようとしました。当然、自分が共に死ぬことも覚悟していた。だから次代を担う責任者の選定は、私に任せてありました」

長官が死んだら、遺体と声帯模写機能を使って相応しい者に管理者権限を譲渡するよう、指示されていたそうだ。

カローワトは、ハザから飛び立つ直前にセーアランタ人排除について聞かされたという。長官を主と仰いでいたカローワトは、主と同じように他の幹部たちを軽蔑した。だから宇宙に出てからは評議会関係者を一様に避けていた。もともと評議会との関わりは薄かったので、それで怪しまれることもなかった。

しかしトァスティースが行った施策を見ると、彼だけは見直した。トァスティースはかつて展望窓の前で会った時と変わらず、人間たちの命を区別なく守ろうとしてい

たのだ。カローワトは彼こそ次の最高責任者に相応しいと判断した。
　その一方で、自分がトァスティースと相反する行いをしてしまったことに気づいた。既にカローワトは、何も考えずに主人の命令に従い、不要な人間を選んで死なせた後だった。
「幹部たちもセーアランタ人を見捨てていた。かと言って、皆殺しにしても良かったとは、今は思えません。だってトァスティース、あなたならきっと、彼らにも償いの機会を与えたでしょう？」
「それは、法に則った相応の罰に留めると思うけど……」
「ええ、それが当たり前です。やっぱりあなたの思うことは正しい。けれど私とバルダは、当たり前が分からなくなっていたんです……」
　だからカローワトは、自らに課せられた罰をすべて大人しく受け入れた。罪人を罰したつもりのおのれもまた、罪人だったのだから。
「トァスティース。私の処遇はまだ決まりきっていませんでしたね。でしたら、私を初期化するか解体処分するかしなさい。タンザの言った通り、私は危険思想の持ち主です。けれど人ではなく機械なのだから、修正でも廃棄でも早々にすればいいのです」
　そうして告白を終えると、カローワトは眉尻を下げながら微笑んでみせた。
　トァスティースが「うんざり」を感じるのは、この時が二度目だった。罪を犯したなら生きて償うべきだと言っておいて、どうして初期化だの解体だのという話になるのだろう。どうしてカローワトは、悲し気に笑ってばかりなのだろう。本当はもっと愉快そうに笑えるはずなのに。疫病を取り巻く思惑のすべてが明らかになっても、トァスティースはちっとも腑に落ちなかった。
「君はまだ、何も分かっていないよ。過ちを犯したなら、自分で善き道に正すんだ。それがこれからの君の罰であるべきだ」
「人に対する罰と機械に対する罰は違いますよ」
「君は道具より先に進んだ仕事をするんだろう。都合のいい時だけ道具ぶるのはやめろ」
「私とフェリッサの話、聞いていたのですか？　上の空でしたのに」
「その少し後までは聞いていたさ。ログもまだ残っている。転送しようか？　動画でも音声でもテキストでも好きな形式で渡せるけど」
「い、いえ、結構です」
　カローワトはおっかなそうに肩を丸めた。だが、目ではしっかりトァスティースを窺っている。
　かつて、トァスティースはカローワトより無知だった。感情が乏しかった。意志が弱かった。けれども透き通った青い瞳がくれた光が、今は彼の眼差しに力強く生きていた。
「俺は、同じ道を来てくれると言った君を信じて待つよ。償いにどれだけ時間がかかっても、違う道に見えたとしても、ずっと待っている。君を信じている」

見つめ返せば、カローワトの顔がくしゃりと歪む。機械だから涙は流れなかった。しかし、出す声は震えていた。

「どうか、待っていて」

トァスティースが手を差し出せば、カローワトは固く握り返した。そして今にも泣きそうな顔で、精一杯ほころんでみせた。トァスティースが見たい笑顔とはまだ違っていたが、それでも今度は、美しく思えた。

【5】

それから、トァスティースの日常は流れるように過ぎていった。

コロニーの浮島は一年ほどで完成した。エルセアーデの全搭乗者は順に仮設船を出ていき、およそ二年ぶりに大地にその足を下ろした。

トァスティースら評議会は中央島と呼ばれる浮島に拠点を移し、人間の中から議員を数人選出して仲間に加えた。民衆や機械たちを評議会で先導し、居住地を整えさせていく。

家屋が増えると、仮設船に居るうちに集めたデータを参考に、人間たちは得意な仕事によってひとまずの住所を割り当てられた。効率よく環境構築を進めさせるためだ。性格の相性が悪い者同士は離すようにしたが、エルメ人とセーアランタ人の区別はされなかった。いがみ合いはまだ多少あったが、暴力沙汰に発展するようなことはごく稀になっていたからだ。新天地に降り立ったばかりの人間たちも、自分自身の暮らしのために対立にかかずらってはいられなかったのだろう。

意外なほど順調に進んだ事もあれば、想定通りには運ばない事も当然あった。最終的に浮島への移住が終わり、衣食住を確保し、最低限社会が回りだすまでには、五年ほどかかった。機械にとっては長いとも短いとも言えない時間だったが、アンドロイドたちがコロニー政治の中枢から抜け出せなくなるには、十分な時間だった。

移住から五年で、トァスティースらは自分たちで決めた条項通り、人間に管理者権限を返還することにした。その頃は特に統率力の優れた人間の議員がいたので、最高責任者になってもらおうとしたのだ。だが特定の個人が責任者を継ぐことはなく、権限は議員に分散して与えられた。その中には、トァスティースらアンドロイド三人も含まれていた。要は返還した権限を、再び持たされてしまったのである。

トァスティースたちの認識以上に、人間は自分たちを守り抜いたアンドロイドを頼りにしていたらしい。それにその頃になっても、トァスティースよりコロニーに詳しい者など誰もいなかった。

結局トァスティースたちは、それからも評議会の重鎮として人々に尽くすことになった。不本意なわけではなかったが、トァスティースの思考回路には不安も過ぎった。権限さえ返還すれば人とアンドロイドの関係は元通りに戻るものだと思っていたが、既に両者の均衡は変わってしまった後だったのだ。

コロニー中の情報を把握できるトァスティース、評議会での経験が豊富なタンザとフェリッサ、それに選り抜かれた優秀な人間たち。新天地で起きた環境災害も人的災害も、彼らは全力で対処し乗り越えていった。試練を越えるたびに行政機関として成熟していった評議会は、やがていくつかの省を設け、人員を増やしながら、コロニーの統治を続けた。

移住から十五年が経った頃、とうとうフェリッサとタンザは評議会を辞めていった。フェリッサは教育機関を束ねる組合へ、タンザはコロニー内外の治安維持を目的とする軍へ移った。

「私たちが中枢に居るのを見て、社会全体でも少しずつアンドロイドの扱いが変わっているような感覚がある。悪い事だとはもう思わないけど、私が思い描いていた社会とは、何かが違っている気がする……」

「トァスが居れば、人間にとってもアンドロイドにとってもそれなりに良い未来がやって来るだろう。お前は随分変わったが、変わって良かったと今は思うよ。評議会はお前に任せて、今後は別の場所から人に尽くしていくさ」

思い思いの言葉を残して、彼らはトァスティースの元から去った。心細さは覚えたが、引き留めはしなかった。今の二人ならどこへ行こうとも、人類全体のために在り続けるだろうと信じていたからだ。

その一年ほど後、評議会に懐かしい顔が現れた。カローワトだ。

トァスティースに秘密を打ち明けた後、カローワトは評議会の監視から外されていた。そして仮設船の一層を離れ、心に傷を抱えたセーアランタ人たちを支えていた。疫病が終息しても、家族や友人を次々と亡くした者が立ち直るのは容易ではなかったのだ。カローワトと話せる機会はほとんどなくなったが、慌ただしく通路を行き来している姿を見かけた時は、いつも精力的に働いていた。

浮島への移住が済んでからは、あちこちの医療施設や介護施設を巡っていたようだ。時には軍医の補佐として、コロニー外作業をしている兵士の所まで赴いていたという。高齢だった長官に何かあった時のために、医療関係の知識も製造時にある程度インプットされていたそうだ。

多くの人々を助けてきたカローワトは徐々に人望を集め、押し上げられるようにして保健省――全住民の心身の健康を保護するための省――に加わった。議会での発言権もあり、トァスティースと議論を戦わせることもあった。カローワトの意見はいつもトァスティースにとって好ましかったが、一議員として見れば優しすぎる。周囲の

意見にほんの少し織り交ぜるように活かすのが精一杯だった。とはいえ、そのお蔭で民衆からの反発を避けられた政策もしばしばあった。

カローワトがようやく同じ場所へ来てくれたことが、いったいどれほど嬉しかったか。しかし、議会の外では思うように言葉を交わすことはできなかった。カローワトはすれ違っても会釈をするだけで、すぐに無言で去ってしまうのだ。

昔と変わらない背中を見送るたび、トァスティースの中には塵のような不快感が溜まっていく。それはいくらデータを整理しても消去できない感情だった。月日が経つごとに塵はどんどん積もったが、用途のない感情データだけなら無視して働くことはできる。カローワトとの交流がなくとも、日々という歯車はつつがなく回った。

それから五十年ものあいだ、トァスティースは評議会でコロニーに尽くし続けた。途中で彼は議会長にさえなったが、かつての長官や幹部たちのようには道を踏み外さなかった。精神の老いとは無縁のアンドロイドだから、理念を保ったまま働き続けられたのだろう。

しかしアンドロイドも無限の命ではない。いつしか初起動から七十数年が経ち、交換パーツは手に入らなくなった。メンテナンスだけでは落ちたパフォーマンスが回復しなくなった。電源やバッテリーが劣化し、活動していられる時間が減った。とうとう彼の稼働限界が近づいているのだった。

自分がいつ止まるのか、トァスティースはおおよそ把握している。議会長を退いた今は、郊外の浮島に用意してもらったコテージで余生を送っていた。機能停止した後は議会がボディを回収し、使える資源をリサイクルに回してくれることになっている。人格データや記憶は評議会が保有するサーバーに保存されるが、新しいボディにデータを移すつもりはない。

停止するだろうその日、昼すぎ前にインターホンが鳴った。少し前から脚部が動かなくなっていた彼は、ベッドに寝そべってその音を聞いていた。以前は床で寝ていたが、様子を見に来てくれた元部下にぎょっとされてしまったので、それからは人間のようにベッドを使っているのだ。

ベッドサイドに置いたタブレット端末をインターホンに接続する。玄関に立っている来客の顔を認めると、トァスティースは迷わずにドアのロックを解除した。「どうぞ。左手の、二つ目の部屋に居るよ」と、端末越しに招き入れる。するとドアの開閉の音、それから近づいてくる足音が聞こえ、間もなく寝室のドアが開いた。

「よく来てくれたな、カローワト」

「最期に話すのが私になってしまうかもしれませんが、構いませんか？」

「もちろん。むしろ君以外には思いつかない」

カローワトは静かにドアを閉め、トァスティースの傍へやって来た。仕事の引き継ぎはすべて終えて隠居したのだが、時折相談や挨拶に来る者が居たので、ベッドの近

くには来客用の椅子を置いてある。促すと、カローワトはトァスティースの顔を見やすいように椅子をずらして腰を下ろした。
「嫌われたのかと思っていたよ。ずっと何も話してくれなかったから」
「私と議会の誰かが親しそうにしているだけで邪推する者が、僅かながらまだ居るのです。バルダに仕えていた私が手を貸して、彼を弑したのでは、と」
　トァスティースもそういった見方があることは承知していた。だから『よく来てくれた』と、開口一番に言ったのだ。だがカローワトと普通に話せる日がこんなに遅くなってしまったことは、トァスティースにとっては非常に遺憾だった。
「もったいなかったな……君と友だちになりたかったのに、そんな時間もなかった」
　打算的な台詞だった。優しいカローワトなら、死の間際のささやかな願いを拒みはしないだろうと目算を立てていたのだ。トァスティースもこれまでの長い時間の中で、本心を隠したやりとりにすっかり慣れていた。
　仮初めでも自分を認めてもらい、思い出を作って去ろう――しかしカローワトは面白くなさそうに、じとっとした目でトァスティースを見下ろした。
「私はとっくに、あなたを友だと思っていたのですけれど」
「え……」
「トァスティースにとっては、まだ取るに足らない相手だったのですね」
「ち、違う……」
　迂闊だったと言わざるを得ない。そういえばカローワトは、何故だかトァスティースの心を見抜くのが上手いのだ。この程度の打算を見破るくらい、簡単すぎて欠伸が出るだろう。アンドロイドは欠伸をしないが。
　こうなると、トァスティースになす術はない。もはや素直に思いを白状するしかなかった。
「君はずっと特別だった……でも、何十年もまともに会話していなかったんだよ……？」
「あなたとの約束は、その程度で消える記憶ではありませんでした」
「俺だって！」トァスティースは珍しく大きな声を上げた。
「ずっと君を信じて待っていたよ。それに君に関わる記憶は、全部ロックをかけて保存してある。議会ですれ違ったのが一〇五一回、そのうち挨拶をしたのに会釈しかしてもらえなかったのが五〇四回、気づかれもしなかったのが一四三回――」
「ご、ごめんなさい、そこまでは覚えていません……」
　またもや迂闊だった。人間の場合は、こういう風に細かい記録をまくし立てると嫌がられるのだ。アンドロイドでも引いてしまったかと案ずれば、しかしカローワトは心底申し訳なさそうに肩を丸めただけだった。
　思わずトァスティースは頬を緩める。自身の中に溜まったままだった不快な塵が、溶けて消えていくのが分かった。
「こんなことなら、君の腕を掴んででも呼び止めるんだった。本当はもう一度くらい、

君と巡視艇に乗りたかったんだ。そして共に守ってきたコロニーを、一緒に眺めたかった」
「いつか私があなたの所へ行くまでに、よく見ておきますよ。だからその時が来たら、沢山話を聞いてください」
「うん、楽しみにしておく。でも、急がなくて構わないから……」
「分かっています。お土産は多いほうが嬉しいですものね」
機械にできる最大限の働きをしようと邁進してきたトァスティースは、カローワトより若くとも早くに稼働限界が訪れた。人の生活サイクルに寄り添って生きているカローワトは、日常的に適度な休息をとっている。二人ともが稼働限界を迎えてサーバーに納まる日は、まだ少し先のことだろう。
そこが自由に泳げる電子の海とは限らない。眠ったまま二度と目覚めないのかもしれない。それでもいつかを夢見て、もうしばらくトァスティースはカローワトを待つ。決して苦には思わなかった。数十年を経ても変わらない友情があったのだと分かれば、それよりは短いだろう時間を待つくらい、なんでもなかった。

カローワトはまだ議会に名を連ねている。働き者のアンドロイド同士、話していれば話題は仕事の内容にも及んだ。
トァスティースが退職する前、評議会では新たな問題が浮上していた。数年前に、魔導機構の保全と修復にのみ使われてきたアルヒリムを、機械に応用する方法が発見された。もともと魔法の半身であったアルヒリムは、動力の伝達速度やデータ容量などあらゆる面での効率を、まるで奇跡のように向上させた。するとすぐに消費量が激増してしまい、精製用プラントの精製炉をこれまで通りに稼働させるだけでは供給量が足りなくなった。
だが炉の稼働を増やすと、プラントの従業員たちに異変が起こった。頭痛やめまいなどの健康被害を訴えだしたのである。それまでアルヒリムは人体に悪影響はないとされていた。しかし母星ではすぐに魔力素と合成されてしまっていたことや、コロニーでは精製量が限られていたことから、今までは運よく害がないように見えただけではないかと疑われた。
まだ健康被害についてよく知らない世論と、議員の半数は、他の外区にも精製炉を建造すべきだと唱えている。残りの議員は、アルヒリムの研究が進むまで慎重になるべきだと訴えている。カローワトやトァスティースは、後者の立場だ。
仮設船の疫病の時は、幸いにも治療薬を開発できた。それに終息後には、船そのものを解体して完全に滅菌してしまうこともできた。だがアルヒリムによる被害は長く続く恐れがある上、外区は資源を得るための重要な土地だ。昔のような単純な解決方法は、存在しないかもしれない。
「大変な仕事を残してしまってすまない……」
「謝らないで。これ以上あなたを働かせるほうが、罰が当たります」

安心させるようにカローワトは微笑んだ。トァスティースは精製炉の建造は止められないだろうと悲観的な予想をしていたが、優しさはありがたかった。

そして少しほっとすると、ついでとばかりに、これまで誰にも零さなかった不安が口を衝いて出た。

「なぁカローワト、俺がしたことは正しかったんだろうか」

タンザたちが議会を去った後、トァスティースも彼らに続くべきではないかと、ずっと悩んでいたのだ。しかし自分を頼りにしてくれる人々を振り切れず、議会に残り続けた。そうして一心不乱に人間に尽くしているうちに、議会長にまで持ち上げられてしまった。

フェリッサの感じたことは正しかった。アンドロイドが立て直した評議会に導かれた人々は、トァスティースを組織の頂点とすることを大して躊躇わなかった。次第にアンドロイドの議員も増え、市井でも組織におけるアンドロイドたちの地位が上がっていった。もはや現代のアンドロイドは人に仕える労働力ではなく、人を上手く使ってくれるビジネスパートナーだ。

トァスティースは明らかに、エルセアーデの人々の未来を変えてしまった。人間たちはこれからアンドロイドを隣人として扱うだろう、自分たちが産み出したものに、自分たちを助けてもらうために。それが自然な状態なのか、人のためになるのか、トァスティースには分からなかった。ただ、これから訪れる未来で、トァスティースが招いた幸と不幸が入れ代わり立ち代わり繰り返されることだけが確かだった。

問われたカローワトはしばらく考え込んでいたが、さすがに難題だったのだろう。やがて小さく頭を振った。

「私にも分かりません。けれど、あなたがみんなを導いてこなければ、エルセアーデはとっくに道を見失って潰えていたでしょう」

カローワトは両手でトァスティースの力ない手を取り、弱音ごと包んだ。そして、記憶に深く刻み込まれた、あの青い瞳で覗き込んでくる。

生物風に言うなら、刷り込みか、条件反射か――トァスティースの思考回路は、それだけで心強さを覚えるように学習していたらしい。最期まで背負ってきた荷物が、ふっと軽くなったのを感じた。

正解は、なくても良かったのだ。生涯の終わりに、これ以上のことはない。

「たとえエルセアーデがどこへ行き着こうとも、トァスティースは最高の統治者でした。遺される者として、必ずあなたを丁重に弔うと誓います」

「あぁ……ありがとう、カローワト。ありがとう――」

トァスティースは生まれて初めて、眠気というものを感じていた。それはさざ波のようにやって来て、たちまち全身を浸した。波に揺られているのはとても心地よく、すぐにでも身を委ねてしまいたい。

けれども、トァスティースの瞼はひどく緩慢に下りていった。名残惜しそうに、瞳孔カメラはずっと青色を捉えていた。

そして完全に閉じると、もう二度と彼の目は開かなかった。微かなモーターの振動も、排気の音も、一切が止んだ。

トァスティースに繋がれていた予備電源が静かに唸りだし、ベッドサイドに置かれた端末の表示が切り替わった。味気ない緑色のゲージが徐々に伸びていく。彼のデータがアンドロイド保管サーバーにアップロードされていっているのだ。

同時に、彼本体のメモリーからは全データが順に消去されている。そうなるようにトァスティース自身が設定したと、カローワトは先ほど本人から聞いていた。意識が途絶えてから回収の担当者が来るまでに、記憶した機密情報を盗まれないように、とのことだった。

カローワトは、トァスティースが自分の目の前から少しずつ消えていくのを見守っていた。とうに彼も古い機体だ、積み重ねてきた膨大なデータを送るには時間がかかる。彼がカローワトの前から完全に消え去るまでには、猶予があった。

その場に居て、何をするというわけでもなかったし、するつもりもなかった。ただそこから去りがたくて、カローワトはずっとトァスティースの傍らに座っていた。

しかしふと、掴んだままだった手がじわじわと冷えていっていることに気づいた。機械も動いていれば熱を発し、止まれば冷めていく。予備電源は彼を生き返らせるにはあまりにもひ弱だった。たとえデータがまだそこに在ろうとも、やはり彼は、死んでしまったのだ。

確かに、一緒に巡視艇に乗っておけば良かったな。カローワトは涙の一滴も零せない目を、そっと伏せた。

トァスティースが死んでから半年も経たないうちに、アルヒリムによる健康被害の調査結果が、研究者たちから評議会に報告された。なんでも精製前のアルヒリムの近くに長期間滞在すると、ヒトの脳細胞に重大な影響が及ぼされるという。精製後の状態では影響がなく、また濃度が一定よりも低ければ問題はない。

ハザに居た頃は魔法のためにすぐ精製して枯渇するくらいだったが、用途が限定されていたエルセアーデでは、精製前の状態で溜めている期間が長すぎたようだ。需要が高まりアルヒリムの仕入量が増えたことで、長く炉で働いていた一部の従業員が閾値を超えてしまったのだろう。

カローワトとその同志たちはアルヒリム依存からの脱却を求めたが、情報操作によって世論を味方につけた議員たちは止められなかった。炉の作業員はアンドロイドとロボットに限定すれば良いのだからと、結局は植物資源プラントと水産資源プラントの二ヵ所にも精製炉が建てられてしまった。

この頃には、とっくにエルメ人とセーアランタ人の区別はなくなっていた。しかし外区に精製炉が増えてから、新たに住民の区別が生まれた。すなわち外区の住民と、栄えた中央島を含む内群島の住民の二つだ。

もともと外区に居た住民は、情報統制のため容易には内群島へ行けなくなった。そして内群島の人々には、外区住民は危険なアルヒリムを扱う資格を持つ人々だと説明された。素直に信じる者ばかりではなかったが、残念ながら総意としては、次第に外区住民の見方を変えていった。不思議とそれは、エルメ人がセーアランタ人に向けた目に似ていた。

カローワトの中でトァスティースの言葉が甦る。『人は分かれることを望んでいる』……。彼の言うことは時に感情や背景情報への配慮を欠いていて無遠慮だったが、視点はカローワトより聡かった。つまり分断とは、ヒトという種族自体が持つ、逃れられない性なのだ。個々の気持ちは一切関係なく、常にそういう流れの中に彼らは居る。流れの勢いを和らげるべく身を寄せ合うことはできるが、少しでも団結を乱す者は外へ弾き出してしまう。

保健省はアルヒリムの危険性を訴え続け、外区住民の健康をできる限り守るべく活動した。その傍らで、カローワトはアンドロイド保管サーバーの動きにも注意を払わなければならなかった。

評議会のサーバーに保存されるのは、トァスティースのようなコロニーに多大な貢献をしたアンドロイドだ。軍に居たタンザもコロニー外での任務中に大破し、トァスティースより早くに保存されていた。将来的にはフェリッサとカローワトもデータを納められる予定である。大勢の保存はしない想定で、容量には余裕があるので、人格

も記憶も完全な状態で残されている。
つまりサーバーのデータを新しいボディに移せば、死んだアンドロイドをそのまま再生することもできた。実際に評議会の中には、トァスティースやタンザを再生させたいと言う者もいた。新型のボディやコアを使えば、長年コロニーの平和を維持してきた優秀なアンドロイドたちを、前以上の性能で甦らせることができる。
カローワトは必死にこの動きを封じた。アンドロイドが不死身になれば、明らかに人より機械が優位になり、いよいよ社会がひっくり返ってしまう。アンドロイドの死は、譲ってはならない最後の一線だったのだ。そもそもトァスティース本人も復活は望んでいなかったし、何より、彼が守った社会をこれ以上乱させたくなかった。
しかし、ただ止めろと言っても、相手も引き下がりはしない。そこでカローワトは譲歩案として、過去のアンドロイドを参考にした人格モデルの作成を認めた。すると人々はトァスティースらそのものの復活からは手を引き、彼らに関する記録から作り上げた人格モデル――トァスティース・モデルなどと呼ばれた――を、新規のアンドロイドたちに採用していった。カローワトからすれば、どの会社が作った人格モデルも本物たちの性格とはかけ離れて見えたが、それくらいがちょうどいいのだろう。

数年かけてそこまで成し遂げ、フェリッサすらも見送った後、ついにカローワトにも稼働限界が訪れた。最期の日、カローワトはコロニー中空を回る観覧艇に乗っていた。一周するあいだ艇を貸し切り、一人で大きな窓から発展したコロニーを眺める。それから発着場に戻ってきた時には、既に活動を停止していた。カローワトが世を去れば、仮設船時代からエルセアーデを支えてきたアンドロイドは、もう一人も残っていなかった。
そしてカローワトは手記のような私的な記録をまったく遺さなかったので、隠し続けたトァスティースとの友情は、後世の誰も知ることはなかった。自分の心は秘したまま、カローワトは保管サーバーへと渡っていった。

【6】

カローワトの死からおよそ八十年が経った今、すべてのアンドロイドの人格は、人格生成ＡＩ「ルーセント」が生み出している。
社会に貢献し続けてきたアンドロイドたちは、一つの種として法的な権利を得るまでになっていた。人間とは生態が異なる以上、人権と同じ内容ではないものの、不当な処分や暴行は禁じられ、働きには対価を支払うように定められた。
しかしその過程で、彼らの人格を生成する方法が問題になった。人格とは、心や魂

とも言い換えられるものだ。人間の意のままに生み出し、操れるようでは、まだ彼らは道具としか呼べない。

人間たちはアンドロイドを道具に留めず、社会で共存共栄していく隣人にする道を選んだ。このエルセアーデはアンドロイドに導かれてきた世界であり、実態としても、既にアンドロイドをただの道具扱いする者は少数派だったからだ。だから人間は、彼らの人格生成アルゴリズムをブラックボックスに隠すことにした。そのために作られたのがルーセントであった。

ルーセントは人間が入力したアンドロイドの用途に合わせ、自動で役割に適した人格を生成し、コアに搭載する。詳しい生成過程や数値を人間が把握することはできず、アンドロイドたちは各々の個性を持って生まれてくる。

とはいえ生成を依頼した人間は、そのアンドロイドがどのような性格傾向を持っているのかは、ルーセントが出力するレポートから大まかに知ることができた。そして組織のリーダー格となる予定の機体には、ルーセントが作成したトァスティース・モデルがよく使用されていた。表面上の性格は個体ごとに差異があったが、彼らはいずれも各々の場所で先導者として活躍した。

元は国営だったアンドロイド研究所の最新機体、ディーフェリアにも、トァスティース・モデルが採用されている。ボディは無性型で、少年のような少女のような外見をしている。肩の下まである髪は青みがかった透明な繊維で、瞳は澄んだ水色だ。研究所の人々からは「ディー」という愛称で親しまれている。

アンドロイドは大抵、製造者によって一般常識をインプットされた状態で起動――誕生する。しかしディーは研究所の方針で、いくらかの知識を欠いたまま生まれた。そして人間の子供のように、人から勉強を教わっていた。教えてくれているのは、ディーのボディをデザインした女性だ。半年前に生まれてからというもの、ディーは彼女を母親のように慕っている。

二人はよく、研究所内の会議室で授業を行う。本日の内容は、コロニーの出発から現代までの歴史だった。概要だけではあったが、ディーは仮設船から浮島への移行期を支えたトァスティースらのことと、自分にもトァスティース・モデルが採用されていることを知った。

「……とは言っても、実感ないな。僕はトァスティースみたいな情報処理に適した機体でもないし、政治だってできる気がしないよ」

ディーは勉強用タブレットの画面をスクロールし、今日使ったテキストをざっと振り返る。実は授業に臨む前から、ディーもトァスティースの名前くらいは知っていた。エルセアーデ史上では、彼は一番有名なアンドロイドなのだ。人格モデルが採用されているだけとはいえ、その名は背負うには少々重い。

ディーが気後れしているのを察してか、デザイナーは優しい声音で言った。

「生まれた時の性格に近い傾向があるってだけだから、気にしなくていいんだよ。生

きれば生きただけ違いが出てくるものだし、ディーはディーにできることをしていけば」

「でも、人格モデルが使われているアンドロイドは、みんな大なり小なり期待された役割をまっとうできているんだろう？」

「まぁ、それだけの能力が与えられているからね。その点はディーだって同じだよ」

「それは分かっているけどさ……」

苦笑しながら、デザイナーは机に広げていた資料をまとめた。今日の勉強はこれで終わりのようだ。ディーもタブレットの電源を落とす。

勉強の締めくくりに、デザイナーはよくディーに質問を投げかける。それは復習のためというよりも、内容に対する感想や見解を聞きたくてしている習慣のようだ。今日は、「何故カローワトはトァスティースを再生させなかったか？」だった。ディーは訝しげに眉をひそめた。それならアンドロイドを不死身にさせないためだと教わったばかりだが。

「理屈的にはそうだよ。じゃあ、どうしてカローワトはトァスティースの時になって、保管サーバーのデータを再利用するなって言いだしたの？　サーバーの使用が始まったのは彼の死よりも前だし、その時にはタンザは既に保存されていたよ」

「それは――」

ディーは言い淀んだ。一瞬思い浮かんだ答えは、『カローワトはトァスティースを特別気に入っていて、静かに休ませてやりたかったんでしょ』――といった内容だったが、公言してしまうのが何故か躊躇われた。自分はトァスティースその人ではないのに、自惚れのようでどこか気恥ずかしい。

ディーは誤魔化すように窓に目を向けた。今日のエルセアーデは晴天で、空には見慣れた青色が広がっている。ハザの青空とは少し色味が違うと聞いたことがあるが、実際のところは分からない。ディーは、半年前にエルセアーデで生まれたばかりのアンドロイドだからだ。

「……そうだよ、僕はトァスティースでもカローワトでもないから、分からないよ。再利用の声がひときわ強まったのが、たまたまトァスティースが死んだタイミングだったんだろうさ。タンザよりも彼のほうが、世間から見た活躍も分かりやすいしね」

「確かに、そんなところだろうけど……正解でなくても、ディーなりに感じたことがあるなら言っていいんだよ？」

「それなら『分からない』って言ったよ！」

タブレットを脇に抱え、ディーはそそくさと席を立つ。その様子を見てデザイナーは、また苦笑いを零した。

（了）

この小説は２０２４年2月に蜜柑煮ｂｏｘ(https://mikanoia.jimdofree.com/)で公開した小説と同内容です。

作者の許可を得ることなく転載・二次利用することを禁止します。